

TAT

<http://tuat-dousoukai.jp.org/>

NO.

農 工 通 信

78

Tokyo University of Agriculture and Technology



小金井図書館

■ 寄稿文隨時募集中

農工 通信

No.78

Contents

目次

■同窓会長挨拶	3
■同窓会理事長挨拶	4
■同窓会第44回通常総会・理事会開催さる	5
■同窓生からの寄稿	8
わが足どりと母校への提言	竹下 悦男 (農学 S34) 8
大学の“あるべき姿”について思うこと	小山田重徳 (機シス院 H8) 8
農工大の印象	濱田 英介 (農学院 S54) 10
母校の暖かさと未来志向	宮脇 昭 (生物 S23) 10
卒業32年、30年の雑感	金丸 隆一 (林産院 S50) 11
母校再発見	新仏 利仲 (機械 S46) 12
那由他、不可思議のことから	富永 洋司 (林産院 S42) 13
国体軟式野球都予選で早稲田大学と対戦	中津 純 (農化 S28) 14
東京農工大学同窓会宮崎支部の記念誌によせて	山本 泰嗣 (農学 S57) 15
大学の思い出	富永友紀子 (農学 S41) 16
十年経って思うこと	松山 隆二 (林産 H5) 16
火事で焼けた生協の顛末	森 房光 (林学 S53) 17
ロボコン世界一への挑戦	北 光一 (機シス H19) 17
横浜開港後の150年間と生糸の関わり	児玉 満男 (製糸 S34) 18
たかが町工場されど町工場	田中 隆 (機械院 S57) 20
団塊の世代に贈る	伊藤 道男 (林学 S48) 21
カプリ島と青の洞窟	鐘ヶ江利常 (林学 S34) 21
近況報告	森下 敏朗 (工化院 S56) 22
卒業後の状況報告	古野 優 (獣医院 S62) 23
運命的な出会いと私の最後の仕事か?	森 恵 (農工 S39) 24
富士山の世界文化遺産登録への課題	渡辺 豊博 (農工 S48) 24
愛媛県下の蚕糸文化財	重松 正矩 (製糸 S32) 26
ハンセン患者の人間回復・社会復帰のため「らい予防法」 の廃止を訴え闘った作家・島比呂志の功績	清野 光一 (獣畜 S20) 27
不思議な東京農工大学同窓会東京支部	馬場 信行 (林学 S35) 28
同窓会支部活動における2つの焦点	村松梅太郎 (獣医 S39) 28
自己紹介	大橋 統州 (農学 S54) 29
北海道支部長就任にあたって	西村 弘行 (農化 S42) 30
農工大同窓会を振り返って	井上新三郎 (農工 S54) 31
同期会に出席して	生垣 博之 (織工 S34) 31
サッカー部 第2期黄金期同窓会	名須川 厚 (獣医 S37) 32
岩崎徹氏(農学 S42)が2006年度JRA賞馬事文化賞	近藤 康二 (農学院 S60) 32
■同窓会創立50周年記念事業の推進	34
■同窓会会員名簿の発行について	34
■平成18年度同窓会学生援助事業報告	35
■同窓会役員等体制	38
■平成18年度卒業生・修了生	39
■部会・支部・クラス会だより	46
■掲示板	50
■事務局だより	52
■広告	54
■編集後記	59

表紙イラストレーション
 <佐藤 勝昭 名誉教授>

同窓会長挨拶

「創立50周年記念事業」「会員名簿の発行」
「財政問題」について

同窓会長 畑中 孝晴 (農学S31)

今年春から不順な天候が続いておりますが同窓の皆様にはお元気でお過ごしのことと存じます。

5月の総会におきまして、私は再度会長に選任されました。もはや古希も過ぎており若い方にお願ひしたいと思っておりますがせつかくのご推挙ですので皆様のご支援をえて暫く頑張つて参りたいと存じます。よろしくお願ひ致します。

今回の総会では通常の議題の他に三つの課題が取り上げられました。

一つは5年後の創立50周年記念事業です。幸い大学側のご理解も得られ大学としての事業と一緒に進めることとなり、同窓会としては今年中に企画委員会で事業内容、募金規模などを具体的につめることとしております。こうした行事は何と云つても同窓生の熱意が大切と思つたので、是非とも物心両面でのご協力をお願い致します。

二つ目は名簿の発行をどうするかという問題です。個人情報保護法の制定もあり平成17年の名簿発行以来様々な苦情が寄せられております。他の大学同窓会へのアンケートでも発行中止または延期というところが多くなつておりますので次期総会までに今後の対応を検討することと致しました。

三つ目は財務問題です。在学中から同窓会に親しみを持って頂くため学生さんへの支援などを充実させたいのですが先輩の数は増えても収入は増えず、いろいろ工夫はしておりますが単年度赤字状態ですのでなかなか思うに任せません。良いチエがないのでしょうか。

同窓会長としてのお役目の一つに卒業式、入学

式の祝辞があります。私が卒業したのは昭和31年ですから50年以上昔です。いろいろ話題になっている昭和30年代もわれらには青春ですが、今の学生さんにとってはご両親の生まれた年代になります。

我々の頃は人々の価値観も社会も単純で生きる目標も立て易い時代でした。食糧難時代に育つた私は「農は国の基」などという理屈はつけましたが 要は腹いっぱい食べたいという思いだけで農学部から農林省に進みました。しかしいま社会は複雑になり、変化も激しく、ライフスタイル、職業の選択、働く場所も世界中、どんな方向を目指そうと360度の自由、あふれる情報、こうした中で自分を見失わないように生きるのは当時よりはるかに難しいのではないのでしょうか。祝辞では志を持つ深く考えるプレゼンテーションの大切さなどを中心に切り口を変えながらお話をしていますが、もっと若い方なら学生さんも親近感をもって聞いて下さるのではないかと云つても年令のギャップに悩んでいます。来年の新生は平成元年生まれが主体となります。こういう方たちのためにも若い同窓生が『農工通信』にどんどん投稿して下さることを願つております。

昨年来『農工通信』とホームページをリニューアルさせて頂きましたが、まだまだ検討すべき点が多々あると思つたので、ご意見をお寄せ頂ければ幸いです。

同窓生各位のご健勝とご発展を祈ります。

ごあいさつ

理事長 生原 喜久雄 (林学S41)

昨年の同窓会総会（43回）で畑中会長より平成18～19年度の理事長指名を受け、すでに1年が経過しました。農工通信77号に理事会でとりくむべき課題を紹介いたしました。会長および副会長の御指導と、常務理事および事務職員の協力で、ほぼ予定どおり処理してまいりました。

今回の同窓会総会で平成19～20年度の会長および副会長が選任されましたので、今後の同窓会の運営について御指導いただきながら、任務を遂行する所存です。

平成18年度では、今までの「農工通信」のスタイルや同窓会のHPを大幅にリニューアルいたしました。また、母校および準会員に対して、積極的に援助を行い平成18年度は昨年度の2倍強を交付しました。平成19年度はさらなるこれらの充実をはかる予定です。

今回の同窓会総会で、2つの大きな課題について1年かけて検討するよう宿題をいただきました。一つは同窓会創立50周年記念事業です。平成24年が同窓会発足50年になります。そこで、昨年11月に同窓会副会長懇談会を開催し、同窓会創立50周年記念事業（たたき台）を提案し、「記念事業計画企画委員会」の設置の了承いただきました。また、懇談会には学長も出席しており、記念事業を成功させるために、大学と同窓会と合同で記念事業を行いたい旨の発言がありました。

大学にとって、平成26年は大変重要な年で、大学創基140年、大学開学65年、大学法人化10年になります。同窓会と大学とで検討し、「東京農工大学創基140周年及び東京農工大学同窓会創立50周年記念事業（仮称）」を行うこととし、そのための「合同委員会」を設置し、準備を進める運びとなりました。今回の同窓会総会において「合同委員会の設置」を図り、了承を得ることができました。また、同窓会で企画している記念事業（募金目標額1億5千万円、東京農工大学同窓会50年

史の発行、小金井に同窓会記念ホールの建築および府中にある50周年記念ホールの改修、同窓会50周年記念学生援助、記念式典）についても了承していただきました。今後は、同窓会です承いただいた内容を含め、「合同委員会」において、協議していく予定です。「記念事業計画企画委員会」のご意見等を伺いながら、進めていく所存です。また、今回の総会で「東京農工大学同窓会の軌跡－大学発足60周年を記念して－（仮題）」の編集委員会の発足を認めていただきました。平成20年の同窓会総会では記念事業計画案を提示し、ご審議していただく予定です。

記念事業を円滑に推進し、予定の規模の募金を達成するためには、部会長、支部長に理解と支援を求める体制を整えることが必要です。ご協力を宜しくお願いします。

二つ目は、同窓会会員名簿の発行についてです。皆様もご存知のとおり、「個人情報保護法」が施行された平成17年に同窓会会員名簿を発行いたしました。今回の総会でもご紹介いたしました。今回の総会でもご紹介いたしました。名簿による勧誘等の迷惑の苦情等が事務局に多数あり、特に平成18年度は事務の仕事に支障がでるほどでした。他大学の同窓会においてもおよそ6割で、中止、延期等を検討しています。

次の名簿の発行は、平成21年ですが、次回同窓会総会までに、①従来どおり発行する、②延期する、③中止するについて検討し、ご審議をお願いする予定です。宜しくお願いします。

再任されました畑中会長の御指導のもと、理事および事務職員とともに、「会員相互の親睦」および「母校の発展」のために、微力ながら努力する所存です。皆様のご支援をお願いいたします。



同窓会第44回通常総会・理事会開催さる

■日時：平成19年5月26日（土）13:45～15:15 ■場所：小金井キャンパス11号館 ■出席者：171名（内委任状54名）

第44回通常総会・理事会は、5月26日、母校小金井キャンパス11号館で開催された。

総会に先だって理事会が開催され、畑中会長を議長として会長・副会長の推挙、常務理事の指名、顧問の推挙、特別会員の推薦、総会の議案が承認された。

亀山副理事長から、出席者が成立定数を超え会議が成立した旨の報告があり、畑中会長から、「今年度は通常の議事のほか、同窓会創立50周年記念事業の推進、同窓会会員名簿の発行の可否についての検討、同窓会の財務状況の健全化の模索等の課題がある」旨の挨拶があった。続いて、出席いただいた小畑学長をはじめ、来賓（笹尾理事、三村理事、有馬農学部長、國見連合農学研究科長、梶井東京農工大学教育研究振興財団理事長）の紹介があった後、小畑学長から、同窓会の支援に対する謝意があり、法人化後4年の大学の現況、テニユアトラック制度、理系女性エンパワーメントプログラム、選択定年制の導入、地域インキュベータ設置等の大学の近況紹介があった。亀山副理事長から、会則第9条に基づき畑中会長が議長を務める旨説明があった。

議事

1. 議事録署名人の選出

議事録署名人に、加藤 誠氏、大谷幸利氏を選任した。

2. 平成18年度事業報告、決算報告、監査報告

高橋総務部長より、資料に基づき平成18年度の実業報告[別記1]、堀経理部長より平成18年度決算報告[別記2]があった。続いて伏谷監事より、決算報告書・帳簿・伝票等精査した結果いずれも適正に処理されており、事業・業務執行状況も適正であること、また個人情報の保護に関する取扱いも適正に行われている旨の報告があり、いずれの報告も異議なく了承された。

3. 平成19年度事業計画・予算案

高橋総務部長より、例年の通常事業計画に同窓会創立50周年記念事業の推進・MOT部会の設置等を加えた平成19年度事業計画[別記3]、堀経理部長より、平成19年度の予算案[別記4]の提案説明があり、審議の後承認された。

創立50周年記念事業については、同窓会50年史の刊行を始めとする事業計画を基に次年度から募金開始する予定としているが、大学と合同で実施することで合意していることから、今後両者の合同委員会で事業内容や実施方法を協議して進めることとなった旨説明があった。

4. 会長・副会長の選出

生原理事長より、平成19～20年度の会長・副会長の選出[別記5]について理事会の推挙案の説明があり、原案どおり選任された。

5. 常務理事の指名

生原理事長より、額額明伯氏（辞任）・吉田秀久氏（転出）の2名の常務理事の後任に、亀山秀雄氏・夏 恒氏を指名したい旨の提案説明があり、承認された。

6. 顧問の推挙

生原理事長より、獣医学部会から推薦のあった、前獣医学部会副会長の小川益男氏（獣医S33）の顧問への推挙について提案説明があり、承認された。

7. 特別会員の推薦

生原理事長より、理事会で推薦された特別会員の紹介があった。

8. 同窓会会員名簿の発行

生原理事長より、平成17年版会員名簿を発行した以降、会員から迷惑電話等の苦情が相次いでいる。そのため、1年間かけて平成21年度発行の可否や発行の延期等について検討し、来年の総会に結論を出したい旨の提案があり、種々の審議の後承認された。

9. 技術経営研究科MOT部会の設置

高橋総務部長より、技術経営研究科からMOT部会を設置することについて申請があり、MOT部会の副会長・理事・代議員を含めて承認された。

総会終了後、総合会館食堂において懇親会が開催された。

[別記1]

平成18年度事業計画

1 第43回通常総会・理事会の開催

平成18年5月27日（土）、本学府中キャンパスにて第43回通常総会・理事会を開催した。1)平成17年度事業報告、決算報告、2)平成18年度事業計画（案）、予算（案）、3)会則及び細則等の改正（案）、4)個人情報保護に関する規則の改正（案）、5)理事・代議員の選任及び監事の選出（案）、6)副会長の交替、7)顧問の推挙、8)特別会員の委嘱等の議事が諮られ承認された。

2 同窓会組織強化、活性化および同窓会財務体質健全化

常務理事会の部制の徹底により業務執行の効率を進め、部会・支部・職域組織活動の活性化を図るために理事の積極的派遣を行った。また、副会長懇談会を開催し、同窓会創立50周年記念事業及び名簿発行に関する調査結果等について懇談した。

収入増を図るために賛助会費増の推進や会費未納者への会費納入の督促、終身会費への切り替えを推進した。また、ペイオフ完全実施に対応するべく、定期預金の一部を順次国債に切り替えするとともに、高利率の定期預金への切替えを行った。

3 会則及び細則等規則の改正

還元金を廃止し、新に部会・支部活動費を交付した。その場合、部会活動費は基本料2万円＋会員数料、支部活動費は基本料1万円＋会員数料とした。なお、千葉共済と横浜会については、従来通り支部扱いとした。また、支部長を総会の構成員とした。

4 農工通信77号の発行

表紙を佐藤勝昭先生のあたたかいタッチの農学部本館の水彩画を載せ、内容構成も卒業生の寄稿文を大幅に増した。また、これまでのB5判をA4判にし「農工通信」のイメージを大幅に刷新した。

5 同窓会HPのリニューアル

部会・支部・クラス会だより等を徐々にHPに移行するため、平成18年度7月1日より、HPを大幅にリニューアルした。

6 同窓会創立50周年記念事業

大学と合同で記念事業を行うための検討を開始した。

7 「機能材料工学部会」の部会名の変更

「機能材料工学部会」の部会名を「繊維・有機材料部会」に変更した。

8 会員動静整理の継続実施

農工通信の未着信会員について追跡を行うため、平成18年度末に会員の大大小小的な動静の調査を行った。

9 財団法人東京農工大学後援会への協力

後援会の業務遂行に対する実質的支援を従来通り継続して行った。

10 母校及び準会員に対する援助、新入正会員歓迎行事の継続実施

学生の勉学・学生生活に関して学会発表、コンテスト・コンクール等発表・入賞祝い、優秀卒論副賞等の援助、学園祭・課外活動の援助、同窓会推薦キャリア・アドバイザー支援を継続して実施し、17年度と比較して、18年度は2倍強の1,925千円を交付した。また、卒業・修了証書カバーの贈呈を継続して行った。

11 会員の慶弔

叙勲7名への祝電、会員逝去20件の弔電を打電した。

[別記2]

平成18年度決算報告 (平成18年4月1日～19年3月31日)

1 基本金決算

(1) 収入 (単位:円)

款 項 目	(A) 平成18年度予算額	(B) 平成18年度決算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	305,651,001	305,651,001	0	
終身会費	2,000,000	2,205,000	-205,000	延73余名相当分(分納を含む)
賛助会費	18,900,000	17,550,000	1,350,000	延585名相当分
その他	1,145,227	1,145,227	0	H17年度特別会計事務機整備費残高
合 計	327,696,228	326,551,228	1,145,000	

(2) 支出 (単位:円)

款 項 目	(A) 平成18年度予算額	(B) 平成18年度決算額	(A) - (B) 増 減	備 考
特別会計繰出	0	0	0	
一般会計繰出	9,450,000	9,450,000	0	
特別繰出分	7,011,069	7,011,069	0	基本金より特別繰出(収入不足分)
合 計	16,461,069	16,461,069	0	

(3) 残高 (単位:円)

収入 - 支出	(A)	(B)	(A) - (B)
	311,235,159	310,090,159	1,145,000

2 一般会計決算

(1) 収入 (単位:円)

款 項 目	(A) 平成18年度予算額	(B) 平成18年度決算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	3,938,931	3,938,931	0	
入 会 金	4,000,000	3,910,000	90,000	782名
年 会 費	2,000,000	1,630,800	369,200	延1,085余名相当分
10年前納会費	900,000	720,000	180,000	48名
利 子	600,000	894,273	-294,273	
基本金より繰入	16,461,069	16,461,069	0	
そ の 他	0	161,861	-161,861	農工通信広告収入他
合 計	27,900,000	27,716,934	183,066	

(2) 平成18年度支出 (単位:円)

款 項 目	(A) 18年度予算額	(B) 18年度決算額	(A) - (B) 増 減	備 考	
事 業 費	15,800,000	14,116,507	1,683,493		
内 訳	会員名簿管理費	3,800,000	2,901,813	898,187	名簿データメンテナンス、動静はがき
	会報発行費	6,000,000	5,592,065	407,935	
	HP管理作成費	150,000	173,460	-23,460	HP更新年間契約料、レンタルサーバ
	部会・支部活動費	2,900,000	2,615,995	284,005	
	新入正会員歓迎費	800,000	715,016	84,984	
	母校援助費	1,700,000	1,925,000	-225,000	
	分収林管理費	50,000	0	50,000	
	資料整備費	400,000	193,158	206,842	パンフレット作成等
会 議 費	2,420,000	2,259,081	160,919		
内 訳	総会会議費	1,820,000	1,786,330	33,670	総会懇親会費、支部代議員旅費
	副会長・部会支部長懇談会	450,000	418,251	31,749	昼食代、支部長懇談会宿泊費
	常務理事会費	150,000	54,500	95,500	
	事 務 費	8,280,000	7,739,474	540,526	

手 当	2,300,000	2,251,768	48,232	
雑 給	2,700,000	2,610,016	89,984	
備 品 費	200,000	88,015	111,985	
消 耗 品 費	1,000,000	832,462	167,538	
通 信 費	600,000	505,773	94,227	
旅 費	800,000	863,220	-63,220	支部総会派遣理事旅費等
事務用品印刷費	300,000	187,131	112,869	封筒印刷、名簿カード
慶 弔 費	60,000	75,770	-15,770	
光 熱 水 費	120,000	91,784	28,216	
雑 費	200,000	233,535	-33,535	保険料(什器備品、事務員、情報)等
職員厚生積立金	100,000	100,000	0	
そ の 他	100,000	60,340	39,660	
予 備 費	1,200,000	0	1,200,000	
支 出 合 計	27,900,000	24,275,402	3,624,598	
次 期 繰 越 額	0	3,441,532	-3,441,532	

3 特別会計決算報告

(1) 収入 (平成18年4月1日～19年3月31日)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(A) + (B) 合 計
前年度繰越金	5,178,388	808,490	5,986,835
繰 入 金	0	100,000	100,000
利 息	3,580	347	3,927
合 計	5,181,968	908,837	6,090,805

(2) 支出 (単位:円)

款 項 目	会員名簿発行資金	職員厚生資金	(A) + (B) 合計
支 出 合 計	463,050	306,000	769,050

(3) 残高 (単位:円)

款 項 目	会員名簿発行資金	職員厚生資金	(A) + (B) 合計
収 入 - 支 出	4,718,918	602,837	5,321,755

[別記3]

平成19年度事業計画

1 第44回通常総会・理事会の開催

平成19年5月26日(土)、本学小金井キャンパスにて第44回通常総会・理事会を開催する。議事内容は、1) 会長・副会長の選任(案) 2) 平成18年度事業報告、決算報告、3) 平成19年度事業計画(案)、予算(案)、4) 同窓会創立50周年記念事業の推進、5) 同窓会名簿の発行、6) その他を予定する。

2 同窓会組織の強化、活性化および財務体質の健全化

部会・支部・職域組織の活動を支援するとともに、各組織との連携を進め、常務理事の積極的派遣を行う。技術経営研究科に部会を設置する。収入増を図るために、賛助会費増の推進や会費未納者への終身会費への切替えを推進する。また、ハイオフ完全実施に対応すべく定期預金を順次国債に切替えていく。

3 同窓会創立50周年記念事業の推進

大学と同窓会で合同記念事業として行う。創立50周年を記念して、「東京農工大学同窓会の軌跡-大学発足60周年を記念して-(仮題)」を発行する。なお、すでに準備委員会を組織し、資料収集及び企画案の検討などを進めており、本事業の総会承認後はこの準備委員会を編纂委員会とする。

4 「農工通信78号」の発行

従来の会報を大幅に刷新した「農工通信77号」が会員からの評価は大変好評であったので、「農工通信78号」も前号の編集方針を基本的に踏襲して発行することとする。

5 同窓会PR活動の充実

同窓会紹介パンフレット及びHPの更なる充実を図り、PR活動に努める。

6 会員動静整理の継続実施

農工通信の未着信会員について常時追跡調査を行うとともに、年度末に、さらに全会員に対して動静調査を行う。

7 (財) 東京農工大学教育研究振興財団への協力

(財) 後援会を改称した本財団の事務に対する実質的支援を従来どおり継続して行う。

8 母校に対する援助、新入正会員歓迎行事の継続実施

学生の勉学・学生生活に関して学会発表、コンテスト・コンクール等発表・入賞祝い、優秀卒論副賞等の援助、学園祭・課外活動の援助、同窓会推薦キャ

リア・アドバイザー支援等を拡充する。また、卒業・修了証書カバーの贈呈を継続して行う。

9 会員の慶弔

祝電、弔電を打電する。

[別記4]

平成19年度収支予算 (平成19年4月1日～20年3月31日)

1 平成19年度基本金予算

(1) 収入 (単位:円)

款 項 目	(A) 平成19年度予算額	(B) 平成18年度予算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	310,090,159	305,651,001	4,439,158	
終 身 会 費	2,200,000	2,000,000	200,000	延73余名(分納を含む)相当分
賛 助 会 費	17,600,000	18,900,000	-1,300,000	延585名相当分
その他	0	1,145,227	-1,145,227	
合 計	329,890,159	327,696,228	2,193,931	

(2) 支出 (単位:円)

特別会計繰出	5,000,000	0	5,000,000	名簿発行資金積立
一般会計繰出	8,800,000	9,450,000	-650,000	賛助会費の1/2
特別繰出分	7,298,468	7,011,069	287,399	基本金より特別繰出(収入不足分)
合 計	21,098,468	16,461,069	4,637,399	

(3) 残高 (単位:円)

収入-支出	308,791,691	311,235,159	-2,443,468	
-------	-------------	-------------	------------	--

2 一般会計予算

(1) 収入 (単位:円)

款 項 目	(A) 平成19年度予算額	(B) 平成18年度予算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	3,441,532	3,938,931	-497,399	
入 会 金	3,900,000	4,000,000	-100,000	780名
年 会 費	1,600,000	2,000,000	-400,000	延1,065余名相当分
10年前納会費	700,000	900,000	-200,000	46名
利 子	1,000,000	600,000	400,000	高利息定期への切替、国債の購入
基本金より繰入	16,098,468	16,461,069	-362,601	
その他	0	0	0	
合 計	26,740,000	27,900,000	-1,160,000	

(2) 平成19年度支出 (単位:円)

款 項 目	(A) 19年度予算額	(B) 18年度予算額	(A) - (B) 増 減	備 考	
事 業 費	15,720,000	15,800,000	-80,000		
内 訳	会員名簿管理費	3,200,000	3,800,000	-600,000	名簿データメンテナンス、動静ハガキ
	会報発行費	5,800,000	6,000,000	-200,000	前年度実績、目録シール代
	HP管理作成費	170,000	150,000	20,000	HP更新年間契約料、レンタルサーバ利用代
	部会・支部活動費	2,900,000	2,900,000	0	
	新入正会員歓迎費	1,000,000	800,000	200,000	卒業証書のカバーをB判からA判に変更
	母校援助費	2,200,000	1,700,000	500,000	前年度実績+拡充分
	分収林管理費	50,000	50,000	0	
内 訳	資料整備費	400,000	400,000	0	パンフレット作成等
	会 議 費	1,930,000	2,420,000	-490,000	
	総会会議費	1,820,000	1,820,000	0	総会懇親会費、支部長・支部代議員旅費
	副会長・部会支部長懇談会	50,000	450,000	-400,000	11月の副会長懇談会のみ計上
	常務理事会議費	60,000	150,000	-90,000	前年度実績(キャンパス往復旅費)
	事 務 費	7,690,000	8,280,000	-590,000	
	手 当	630,000	2,300,000	-1,670,000	職員の退職
内 訳	雑 給	3,860,000	2,700,000	1,160,000	パートの増員、パートのベースアップ
	備 品 費	100,000	200,000	-100,000	前年度実績
	消 耗 品 費	900,000	1,000,000	-100,000	〃
	通 信 費	550,000	600,000	-50,000	〃
	旅 費	970,000	800,000	170,000	支部総会派遣理事旅費等(前年度実績)
	事務用品印刷費	250,000	300,000	-50,000	封筒印刷、名簿カード、振込用紙
	慶 弔 費	80,000	60,000	20,000	前年度実績
光熱水費	100,000	120,000	-20,000	〃	

内 訳	雑 費	250,000	200,000	50,000	前年度実績、火災保険料等
職員厚生積立	100,000	100,000	0		
その他	100,000	100,000	0		
予 備 費	1,200,000	1,200,000	0		
支 出 合 計	26,740,000	27,900,000	-1,160,000		

3 平成19年度特別会計予算

(1) 収入

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(A) + (B) 合 計
前年度繰越金	4,718,918	602,837	5,321,755
繰 入 金	5,000,000	100,000	5,100,000
利 息	3,800	200	4,000
合 計	9,722,718	703,037	10,425,755

(2) 支出 (単位:円)

款 項 目	会員名簿発行資金	職員厚生資金	(A) + (B) 合計
支 出 合 計	300,000	470,000	770,000

(3) 残高 (単位:円)

款 項 目	会員名簿発行資金	職員厚生資金	(A) + (B) 合計
収入-支出	9,422,718	233,037	9,655,755

[別記5]

同窓会会長及び副会長 (平成19・20年度)

役職名	氏 名	卒年度	推薦母体
会 長	畑中 孝晴	農 31	常 務 理 事 会
副会長	藤巻 宏	農 36	農学・生物生産学部会
〃	草野 洋一	養蚕47	蚕糸生物学部会
〃	安藤 哲	植防47	植防・応用生物学部会
〃	久米 賢次	農化47	農芸化学・応用生命化学部会
〃	佐渡 篤	林産38	林産・生物資源工学部会
〃	星野 義延	環保53	環 境 科 学 部 会
〃	松井 英輔	林 38	林 学 部 会
〃	田内 堯	農工35	生産環境工学部会
〃	本間 秀和	地生H12	地域生態システム学部会
〃	宮本 譲	獣畜22	獣 医 学 部 会
〃	西出 照雄	製糸41	製糸・高分子・生命工学部会
〃	壁矢 久良	織工35	繊維・有機材料部会
〃	町山 紀郎	工化39	化学工学部会
〃	遠藤 幸一	工化46	応用分子化学部会
〃	新仏 利仲	機械46	機械システム工学部会
〃	宇野 亨	電気55	電気電子工学部会
〃	大野 直次	応物47	応用物理学部会
〃	岩澤 京子	数情56	情 報 工 学 部 会
〃	渡邊 俊夫	獣医49	M O T 部 会

同窓生からの 寄稿



わが足どりと母校への提言

竹下 悦男 (農学S34)

大学在学の時駒場寮々長や日本農学学生ゼミナール連合書記長などを務め青春の情熱を燃やしたり、日本農業と農政のあり方に思いを馳せた。農学科農業経済学専攻だった。

卒業と同時に長野県庁に採用され、農政の企画からスタートし、次に県行政の組織管理、青少年対策、市町村指導などを経て社会福祉行政の企画をすることとなった。

その後農政部畜産課長のとき何となくふるさとに戻った感じだった。GATTなど貿易問題や大規模経営問題など課題山積だったが、これが商工行政や特に産学官連携を主張する“テクノ・ハイランド構想”を提唱するのに大きく役立った。

商工部長、総務部長で“ふるさと創生”や冬季長野オリンピック招致に携わり、公営企業管理者を最後に県職員を早期退職し、ふるさと上田市長を一期つとめた。大きな改革と実績を遺しえたと思っている。一昨年の春70才と共に叙勲の栄に浴しえた。

これら全職場を通じて東京農工大学農学部出身であったことが全ての分野に通ずる原点であったし、当時の学問分野の幅広さに感謝している。

日本の社会・農業・農村の実態を想うに今一つ何かがあるもの足りない。食糧自給率の面からも憂慮すべき状況にあるが村社会における農地の荒廃も

目に余る。これは真に日本人の勤勉で精緻な精神的支柱をも蝕みつつある。

国際社会の中で日本人の貫禄を落す結果ともなり、GNP比較などの問題ではない。

60年前の農地改革は当時の国状としては正しかったが、その後の対応が適切でなかった。日本の将来を見通していない。基本法農政の桎梏ともなったが農村や地域社会における精神的土壌を崩壊させただけで未だ深みあるものが形成されていない。例えば、該当家庭の経済的支柱でないのに離作料を認めているなどは時代錯誤も甚だしい。

日本が科学立国として生きるためにも、又豊かで楽しい食生活や家庭生活の意義を深めるためにも市民農園（クライン・ガルテン Klein Garten）ゾーンを都市周辺に大幅に実現し、国家国民の精神的土壌を培ってほしい。実践的伝統をもつ母校が先頭に立って国政をリードし改革してほしい。

昨年社用で500人余のわがインド工場を視察したがインド国民が生きる姿に感動した。生きる姿勢のすばらしさだった。カースト制度はあるがもっと前向きに生きていて羨ましかった。

独立行政法人化の時代、学内活動の間口を広げ、日本人の人材づくりに母校がさらに貢献してほしいと願っている。

(昭和34年農学科卒、前信濃同窓会長)

大学の“あるべき姿”について思うこと

小山田 重徳 (機シス院H8)

私はH7年度に堤研究室を修了しました小山田と申します。農工大関係の方や諸先輩方におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。私は農工大修士課程修了後に(株)クボタへ入社し、今年で11年になります。クボタに入社してから7年間は住宅用外壁材の生産技術、製造、開発、その後3年間はディーゼルエンジンの生産技術、そして昨年8月より関連会社であるクボタ精機(株)に出向し、米国の関連会社であるKMA (Kubota Manufacturing of America) で生産されているユーティリティビークル（多目的四輪車、<http://www.kubota.com/f/products/>

rtv.cfm) 搭載用トランスミッション製造部門で製造課長を務めております。

私が入社11年目にして会社のマネジメントに携わることができた一つの大きな理由として、堤研究室在籍中に堤教授や堤研究室の先輩方より研究を通じて社会人としての基礎を厳しく、厳しく(ごく稀にやさしく)、教えて頂いたことが挙げられます。本稿では、私の堤研究室での体験を通じて感じた社会人にとって必要なこと、そして大学の“あるべき姿”について書かせていただきます。

堤研究室では各自が研究テーマにおいて成果を上げるだけではなく、学部生や修士生がそれぞれの役割を持つことで研究室が一つの組織として運営されており、私はその中で社会人としての基礎を培うことができたと考えております。

輪講、学会発表や論文において学部生が作成する資料については、先輩である修士生が責任を持ってチェックしてから堤教授に提出するというルールがありました。堤教授に報告するに値する成果を上げるために学部生は必死で研究を行いますし、修士生も徹底的にチェックを行うので実験や資料作りが徹夜になることも珍しく無かったです。これらを通じて学部生は研究の進め方や結果のまとめ方を学び、修士生は相手に自分の考え方を指導しそれを実行させる能力を身につけることができたのではないかと思います。

報告資料が完成したら堤教授にチェックして頂きます。研究に妥協を許さない堤教授のチェックは厳しいものがあり、輪講の後は傷だらけで家に帰る枕を濡らす日も多かったのですが、我々の研究における計画・方向性(P)とその結果(D)に対する修士生と堤教授のダブルチェック(C)を受けて今後の研究活動に繋げる(A)というPDCAを確実に回すルールが堤研究室には存在していたので、我々は苦しみながらも研究を効果的に進めることができました。

以上のような研究室での経験は現在の私の仕事においても大きく役立っています。堤教授や先輩方の厳しいご指導のおかげで少々のことではめげない根性がつきましたし、研究室で学部生を根気よく指導しPDCAを回す習慣がついていたため、現在も部下を指導し仕事のPDCAを確実に回すことで仕事の結果が会社の利益につながるよう導

くことができていると感じています。

堤教授にはよく飲み連れて行って頂き、酒の場においても多くのことを学びました。堤教授は酒の場ではあまり具体的な研究の話はされませんが、物事の考え方や課題解決へのアプローチなどについて事例を挙げてわかりやすく教えて頂きました。その中で現在も心に強く残っているのは、研究(仕事)に行き詰まったら“逆転の発想”を持ちなさいということです。5円玉をフライパンで熱した時に真ん中の穴は大きくなるか小さくなるか?この課題に対するアプローチとして10円玉を熱した場合にその真ん中は膨らむのかへこむのか?穴のある5円玉に対して穴の無い10円玉で考えるという逆転の発想を用いることで、5円玉の真ん中の穴はフライパンで熱すると大きくなるという結論に達することができるという考え方です。私の11年間の社会人生活の中で、この逆転の発想には幾度となく助けられました。生産ラインにおいてネック工程を改善する場合、現状を肯定して改善を進めるのと、その工程を無くしたらどうなるか?という発想で進めるのでは結果が変わってきます。無くすという発想によって新たな方向性が見え、課題解決に近づくことは多々あります。

このように堤研究室に在籍した3年間の中で学んだことは、私の社会人生活における原動力となっています。社会人になって感じることは、出身大学や学歴はその人を評価する指標とは全く関係が無く、その人が大学で何を学んできたのかが最も重要な指標となるのではないのでしょうか?従って、私の考える大学の“あるべき姿”は社会で活躍し日本の技術力、経済力の向上に貢献できる人材育成が行える大学ではないかと思います。農工大で堤教授や先輩方を始め多くの仲間に出会えたことは私の大きな財産です。そして“あるべき姿”である堤研究室を卒業できたことを誇りに思い、これからも会社の発展とその先にある日本の技術力発展に貢献できるよう努力していきます。

最後になりましたが、皆様の今後のご発展とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

農工大の印象

濱田 英介 (農学院 S54)

振り返ると30年以上の年月が経っていました。そのころは、府中も東小金井も空き地や畑が多く、時間の経過もゆったりとしたものだったように思います。日本中にひろまっていた学園紛争はほとんど跡形もなく、バンカラもサムライも少し前までの先輩のものであり、“やさしさ”や“まじめさ”が前面に出てきた平穏な時代でした。そんな風潮に甘えてか、飽きたらずかコンパや合宿の打ち上げは時に修羅場と化しておりました。教職員の方々には権威主義的なところがなく、農工大独特の自由な校風はこの方々によって支えられてきたのだと、今になって思います。また、農学部正面の櫛並木や大久保利通公の碑は卒業生のみならず訪れた方々に共通の強い印象を残すシンボルになっていると思います。

当時、デジタル化、マニュアル文化などという言葉もなく、遺伝子組換え技術もナノテクも携帯電話もWindowsもまだありませんでした。学生としては当然のことながらお金も車もなく、時間だけが十分ありました。その時間をどう使ったのか、ほとんど思い出せません。多分、いろいろなことをしていたのでしょうが、それらが必要でありまた楽しいからというだけでなく、“考えるための材料あるいは経験”をいつも自由に求めていたようにも自分には思えます。まだ若かった証拠でしょうが、今の若い人たちにも不便さや、ゆっくりした時の流れが必要なのではないのかと思うことがよくあります……。

お世話になった先生方はもう殆ど退職されていますが、農工大で教壇に立たれている先輩・後輩がおられるせい、あるいは当時の印象が強いせい、か遠い昔の思い出の場所というわけでもありません。

さて、私事ですが私は丁度10年ほど前にそれまで勤務していた企業を退職し、宮崎県都城市の都城工業高等専門学校(高専)に赴任して参りました。都城市は宮崎県の西端に位置し、島津藩発祥の地であるとともに、弓の生産地としても有名です。最近都城出身の“東国原(ひがしこくばる)知事=(そのまんま東氏)”が全国的に話題となっています。工業よりも農業の盛んな所で、全国でも有数な畜

産業と林業地域です。私は農学部出身のため、そのまま進んでいけば専門を生かすのにうってつけの土地であったかもしれません。しかし自分の専門も職域もだいぶ変わってしまいましたので、当地の農業へあまり貢献できる立場ではありません。しかし、現職場の高専からは成績優秀な学生をほぼ毎年農工大の工学部3年に編入学で受入れてもらっていることを知り、卒業後30年間という長い時間と東京-宮崎という遠距離にも関わらず、今なお農工大とのご縁があることを秘かに喜んでおります。常々世の中は繋がっていると思っておりますが、その繋がりが農工大の場合良い気風を引き継いだものとなっていると感じます。

宮崎市で開かれる同窓会支部会には毎年参加し、30年前の農工大とその前後の変遷を知る方々と楽しく交流させて頂いております。

母校の暖かさと未来志向

宮脇 昭 (生物 S23)

昨平成18年(2006)10月20日午後、循環社会システムを目指す東京農工大学で「いのちを守る森づくり」と題して話をさせていただく機会を得ました。1945年ちょうど終戦の年の4月に入学して3年間、当時農学部併設されていた生物科の教員養成課程に在籍し、この府中の学舎(まなびや)で厳しい戦中・戦後の中、一生懸命実習したり、また日本でも代表的な末松直次先生に分類学、石井悌一先生に昆虫学、大賀一郎先生に植物生態学などを習い、農場でさつまいもの栽培をし、胴乱をかついで、多摩の山々に植物採集などに出かけました。私は農家の4男坊に生まれ、郷里の岡山県立新見農林学校を卒業して、なんとしても東京・府中の農林専門学校で学びたいと空襲の中受験しました。

その頃正門のけやきの若々しい並木、隣の明星中学の校庭との境にはスダジイなどが植えられていました。戦後の最も厳しい条件下で、先生や級友たちとお腹がすく中で学んできた思い出の地です。それから60年たった現在、今や世界に誇る東京農工大学として発展している。懐かしさが蘇るとともに走馬灯のごとく、かつて60年前に3年間、あの極限状況の中で皆んな一生懸命生きてき

たすばらしい思い出。時代がかわり学生も先生方もみんな代わっている。しかし、最初講堂に入ったときに他のどこで話をするときよりもアットホームのすばらしい雰囲気の中で迎えられた。小畑秀文学長、有馬泰紘農学府長さんのご挨拶、また同僚の福嶋司教授からの紹介の後、講演させていただきました。

東京農工大を出て、広島文理大で雑草生態学をやり、その後ドイツで最も大事なことは土地本来の生物生産能力を把握することだ。同時にその知見のもとで農林業、土地利用・保全を進めるべきだ。同時に急速な自然開発、都市化の中で、これからは防災・環境保全林・水源涵養林、いのちの森を農家のまわり、農地、牧野のまわりにも、都市の中にもつくるべきだと、恩師のR. チュクセン教授に強く潜在自然植生の概念を現場でたたきこまれました。その後日本の各地に残っている鎮守の森などを調べては様々な人間活動によって変えられている土地本来の緑の自然—日本の国土の大部分は森であるが—；現在の潜在自然植生を現場で徹底的に追及してきました。幸いにも先見性をもった企業や各省庁、地方公共団体、そしてなによりも多くの市民の皆さん、若い学生、特に女性が今日本でも非常に力強く協力してくれて国内はもとより生態学的な現地調査にもとづいて中国、またボルネオ、アマゾンの熱帯林再生をしてきました。昨年から2004年にノーベル賞を受賞したワンガリ・マータイさんの依頼でケニアの植生調査、森づくりを進めています。現場主義によって自分の体をつかって土のにおいをかぎ、残っている木々を調べ、森が人間によってどのように利用され、破壊されているかを現場で見、何よりも本物志向で森づくりを皆さんとともに進めています。

今や緑化が単なる美化運動、また大事なことではあるが木材生産だけでなく、すべての市民いのち、地域に根ざす固有の文化を創造するところ、そして何よりもかけがえのない自分の、隣人の遺伝子を未来に残す緑のしとねとしてのいのちの森づくりを目指し、皆さんとともに進めています。私の現場主義とは、現場に出て、なまの自然を自分の体を測定器にして目で見、手で触れ、においをかぎ、なめてさわって調べることから始めます。この原点は、かつて農工大の府中で厳しい中でも当時のすばらしい諸先生方の現場で植物採集しながら調べ、農場の

真っ黒い土の中でさつまいも栽培と周りの雑草とりや野菜の栽培などやってきた1945年4月から3年間のおかげです。

そして60年目に迎えられた東京農工大の皆さん。初めてお会いする方も多いが、諸先輩方、先生方、同窓会幹部の皆さん、外国からの留学生も含めた400人近い学生と地域の市民の皆さんの暖かい雰囲気の中で、ほんとうの意味でのわが学びのふるさとに帰った思いで限られた時間でしたが、皆さんと話しあい、未来志向の新しい発展のエネルギーを母校農工大、府中キャンパスでいただいたことを大変感謝しています。

我々は過去の厳しい中でも一所懸命学び、活動しました。その基盤にたって前向きに生きる。もっとも大事なことは、いのちを守る生きた緑の生産素材を使って、食糧や果樹、林産物生産、農業生産そしていのちの森づくりです。それと工学部を含めた各分野の発展を循環システムと基本として学び、研究している農工大の皆さん。それを見守り、育ててこられている同窓会の皆さんに深い敬意を示し、私もその1人として共に前向きに頑張っていきたいと願っています。

ほんとうに母校の暖かさ、そして東京農工大学が循環社会志向、未来志向で学長をはじめ全学が同窓会の皆さんと運命共同体として発展している姿に改めて感銘しています。私も限られた人生を同窓会の皆さんと共に未来に向かって心豊かに、楽しく力強く木を植えながら生きていきたいと願っています。

卒業32年、30年の雑感

金丸 隆一（林産院S50）

私が入学した当時の国立大学の授業料は確か1万2千円、樗寮の寮費が2食で4～5千円位で毎月の奨学金からおつりがあつたと記憶しています。社会は躍動感を持ちながらも緩やかに流れていたようです。今は授業料も50数万円とか、実に数十倍となっています。大卒の初任給は4～5倍でしょうか。あらゆるものの価値が大きく変化してきました。教育に関しては親子共々受難の時代であるのかもしれませんが。一方我が国では04年から少子化が始まり国を挙げて出生率をあげようと

必死ですが、若い親御さんは今一投資意欲がわからないのではと心配です。

さて、私が入学した時代は人生50年という言葉がありました。現在は80年と変化してきています。小生も卒業して30年経ち50代半ばとなり、生活習慣病と共生しながら良く言えば闘いながら、統計学的にはあと30年、どう生きていくか沈思黙考中です（実は何も考えていないのかもしれませんが）。

ところで、学生時代の思い出ですが、1年に1回位夢を見てハット目を覚ますことがあります。卒論が通らず担当助手から「金丸君卒論が駄目だった。あと1年頑張るか」と言われ、どうしようかと考えた時です。このような夢を見るくらいですので推して知るべしとご推察下さい。この助手先生もいつのまにか教授となっており、先般電話をしてみたら、曰く「金丸君はあと何年か」と問われ、「あと6年です」と言うと、「俺と一緒に、俺がいる内に学校に来てみたら」と言われました。この先生とも電話で時々話をしますが24、5年は会っていません。同じように4年ほど前山梨県に行ったとき、卒業以来始めて会った同窓は、外見こそ年相応に変わっていましたが、学生時代と全然違和感がなく色々と当方の仕事の段取りを取ってくれました。つくづく大学時代の先輩や友人はよいものだと感じました。高校の同窓にも違った味がありますが、思春期は記憶力が発達中なのか久しぶりに会うと名前と顔が一致しないのがたまに傷です。

母校再発見

新仏 利仲（機械S46）

私は中小企業の経営者として機械の製造販売を行っています（<http://www.nisseiweb.co.jp>）。最近、年を追う毎に大学と関係が深まり大学の良さ、有難さを感じる今日この頃です。学校にお世話になっている最近の感想を、感謝を含めて少々書かせていただきました。

1971年やっとの思いで工学部、機械工学科を卒業しました。ホッととして、そのまま20年以上学校に近付くことはありませんでした。機械作り以外の幾つかの仕事を経て、また、機械作りの分野に

舞い戻ってしまいました。そして1994年秋、工学部、機械システム工学科卒業生の親睦団体、機友会の総会に参加しました。

現在転造盤と言う工作機械作りの株ニッセーに在籍していますが、ここで少々弊社の丸転造盤を説明させて頂き学校との関係の再開をお話します。転造盤とは2個のタイヤ状の金型を回転させながら近づけ、タイヤの溝に当たる部分の間に挟んだ棒状ワークに転写する塑性加工機械です。（転造盤は弊社ホームページをご覧ください（<http://www.nisseiweb.co.jp/library/index.html>））。

このような仕事柄、「塑性加工」の先生に話し掛けてみました。先生の研究は板の成形でしたが、同じ塑性なら転造をテーマで研究してみましようという事になり、それから早くも12年近くお付き合いを頂いているのが桑原利彦先生です。母校の先生という親近感もあり、何の疑問も心配も無く今日まで弊社の機械の進歩にご協力頂いています。先生から紹介を受け、多くの先生方とお知り合いになることも出来ました。また、私が現在の会社の社長になってから毎年のように、母校の後輩に弊社に来て頂いています。さらに年に一度集まる機友会を通じ、先輩、後輩との巡り会う楽しいひと時をすごしています。

私はNC制御の転造機を作ろうと決意し、始めに、転造機がNC化することにより進歩性があるかどうかを検証することにしました。そこで手掛けて頂いたのが前述の桑原先生です。その後、4年掛かって弊社が本格的に機械を開発し、GALAXY転造機として発表しました。写真上にある自動車の電動パワーステアリング用ウォームは写真下の材料を素材としてGALAXY転造機で塑性加工（転造）したものです。



発表したら売らなくてはなりません。私共は中小企業ですので広告に費用を沢山かけるわけにはいきません。そこで、賞を貰ってマスコミに宣伝してもらおうことにしました。その際、何処の賞がどういう格付けになっていて、何処から始めたら良いか、推薦者はこの方辺りの人が良いかな、とか色々とおアドバイスを頂きました。また、学科の先輩で日立精機の副社長をされていた四宮さんからは、「申請書の書き方にはポイントがあります。ここが強調すべきでしょう」とか・・・多くの助言を頂く事ができました。桑原先生のご指導はもとより、先輩の元富士重工株式会社のトランスミッション設計部長鳴海さんや、澤田元教授など先生方にご支援ご鞭撻を頂いた結果、受賞したのが、日本機械学会賞、日本塑性加工学会賞、素形材産業技術賞、中堅・中小企業新機械開発賞、文部科学大臣賞の五賞でした。

ところが、全く新規な商品ですから、その存在をユーザーは全く知りません。機能・精度も優良なので、製造設備も良いものが要ります。人材も間に合わなくなります。進み始めたプロジェクトは止めるわけにはいきません。少しでも、支援して下さいとお願いすればと思い、「補助金」の申し込みをしました。今は補助金を頂きながら開発を更に進めています。大変に役に立っています。事業は刻々と変遷して参ります。そのたびに時に応じた手を打って参りましたが、行く手は遥か彼方のようです。母校の名を実業界で高められるようこれからも大いに頑張るつもりです。

ここまで仕事の事をお話をさせて頂いてきましたが、変遷は、人生も同じかなと思いました。人生は個人事業のようです。常に軌道を修正していく必要があると思います。多くの良い・悪い環境の中で揉まれた苦闘の結果、変えられるものと思いました。

私たちはいわゆる団塊の世代です。体力、知力が劣化してくるこの世代は何かと精神面、体力面にリハビリが必要ではないでしょうか？そんな時、たまに学校に顔を出してみると意外に参考になることもあると思います。今までの自分のキャリアを更に高めて、これからも世の中に役立ちたいと思う卒業生が沢山いらっしゃる事でびっくりしています。

桑原先生から始まった大学とのお付き合いは、今幅広く学术界、実業界の多方面の方々へと幅の広がりとなりました。また、学生時代に所属していた第三文明研究会とは今も交流が続いています。東京農工大学がこんなに広がりを持たせてくれるとは思いませんでした。今は感謝、感謝の思いで一杯です。農工大、万歳！

那由他、不可思議のことがら

富永 洋司 (林産院S42)

私は昨年(平成18年)の3月に、37年余の農工大を退職いたしました(赴任時は農学部の林産学科 材質改良学研究室、そして退職時は、環境資源科学科 資源複合機能学研究室)。在職中の仕事は、木質資源材料(木材素材および集成材・合板・ボード類など)について、主にその寸法安定化や接着・接着剤などに関わる事柄でした。

退職する少し前に、私が体験した「那由他、不可思議のことがら」、そのような驚くべき、やや衝撃的な二つのことがらに遭遇しました。そこで先ず、この二つのことがらを簡単に紹介し、次に、私の好きな思い出の不可思議なことがらも紹介して、遅くなりましたが退職の挨拶に代えたいと思います。

一つ目はお山へ行ったときです。登り2時間足らずのお山へ一人で行った帰り道、夕闇迫るころ、誰も居ない小川の辺でシャツを着替えようとザックを片手に、前屈みになり、そして顔を上げると、小川の向こう岸にハシビロガモのような口をした体長450センチほどの胴長短足のケモノが、極めてゆっくりとペタリペタリとのごとく(音は聞こえず)、右から左へと10メートルほど歩き過ぎ、去るかと思えば向きを変え、その底浅い小川を平らな石伝いに渡って来て、こんどは真っすぐに私の足元、ホンノ靴先まで同じ歩調で近づいて止り、その間、口先は地に触れんばかり一度も上を向かず、しばらくそのまま、そして何を思ったか静かに右折して視界からゆっくりと消えて行きました。これらのことを小学校時代の友人にメールすると「そのケダモノはカモノハシ？」との返信が来ました。凶星のようで嬉しいが、オーストラリア東海岸付近で大切に保護されておりそれは有り得ないという「？」マーク付き。これが一つ目

の誰にもほとんど信用されないという出会い・衝撃です。

二つ目はそれから半月ほど経ったときです。樹木に陽光が反射して明るい午後3時近く、府中キャンパスの私の居る静かな部屋(1号館3階、東南隅。ベランダ付き)で、超音速飛行物体の衝撃波かと思うような音がドンとしました。窓ガラスヘキジバトが激突した音でした。ワシタカ類(オオタカ?)に追われてきた様子でした。窓ガラスは割れずにキジバトは、液状物がガラスにくっつき落ちつつある激突痕から斜め前方に、ベランダの中に墜ちていました。暖かくなると「デーデーポッポー」をくり返して、多くの人に親しまれるキジバトは、この鳥名を冠した「会報(野鳥研究会)」があるほど、農工大構内では、今でもごく普通に出合えるはずですが、一方、下方へ長く伸びた液状痕および飛び散った激突痕のある窓ガラスは、その鮮明な痕跡は、その当時そのままにしていました。これが二つ目の、自然界の現実とはいえ、やや悲しい衝撃です。

これら心の糧ともなるような、琴線に触れるような不可思議な出会いが、私の若い時代にもありました。それは、むかしザイカイ(材質改良)の学生のときに、同研究室の友人と二人で北海道へ行ったときのことで、一つは、大雪山・北鎮岳へ登る途中で「エゾミユビゲラ」に出合ったこと。この鳥は、その当時の図鑑にも「…その数は少ない」と記されているほどで、決して見られないはずでした。そしてもう一つは、然別湖の近くで、一抱えもありそうな枯損木・倒木上の「クマゲラ」に出合ったことです。これら珍しいキツツキ類との出会いは、おそらく信じ難いことでしょう。だからこそでしょう。この二つの出会いは、その後、ずっと心の奥底に宝物のように残ってきました。そして最近、60歳になったころでしょうか。一人で山歩きのときに、落葉した木の枝上に、鈴なりのごとく夕日を浴びるサル達が前方に出現し、その下の斜面を通り過ぎることもできずに、しばらくそのまま立ち止まっていると、私の存在に気がついたのかサル達は、その枝上から順次消えていきました。また後日、同じ山でやはり夕刻、緩やかな斜面・地表で憩う子連れの子猿を双眼鏡で見ていると、逞しげな親に睨まれ追いかける

れ、いつの間にか背後の樹枝上から監視されていました(そのとき、やや離れて地表に子ザルが…)、お山では大変嬉しい出会いのはずでしたが…このときだけは、肝を冷やす心地でした。

以上、私としては、真に不思議な、不可思議な体験でした。しかし、これからも出来ればそんなことがらに遭遇してみたい…などと思っています。

国体軟式野球都予選で早稲田大学と対戦

中津 純 (農化S28)

話は56年前に遡るが、我々農学部一期生は一部専門学校生を加え近隣の一橋大、学芸大、東京薬科大、写真大、文政大の5校と新制六大学野球リーグを結成し準硬球による春秋2回のリーグ戦を行っていた。リーグ戦では投打の安定していた農工大と一橋大が常に上位を争っていた。当時は戦後間もない物資の乏しい時期であり、各校の選手はまちまちのユニホームを身に纏い、使い古したグローブでプレーをしていた。そのような時に幸運にも夢のような話が舞込んできた。昭和25年9月4日、都営小石川球場において行われた国体軟式野球大会東京都予選大学の部に出場することができたのだ。初戦は獣医学科荒岡投手の剛速球で写真大を一蹴し、2回戦は不戦勝。翌5日は準決勝戦へと勝進み、強豪早稲田大学と対戦することとなった。試合に先立ちホームベースを挟んで両チームが挨拶を交したが10名の農工大選手に対する早大選手の多さ、体の大きさ、色の黒さに先ずは圧倒された。まるで大人と子どもが2列に並んだようで度肝を抜かれた。バックネット裏には多くの新聞記者が詰めかけていたが、その中の一人から「早大の乙幡投手が今日はノーヒットノーランを達成して見せると豪語していたよ。」と聞かされますます萎縮した。農工大の打順は次の通りだが、これ以外には植田がたった一人というぎりぎりのメンバー。監督は体育の武笠教官。

RF倉茂 2B小島 SS小林 3B高島 LF田部 1B蠣崎 C谷井 CF高村 P中津

試合は農工大の先攻で始まり、一番倉茂は簡単に三振。続く小島は速球をセンター前に快打。これに動揺したのか早大投手は次打者小林に四球を

与え、一死一、二塁と農工大のチャンス。しかし善戦したのはここまで。後は続かずチェンジ。代って早大の攻撃はといえば、丸太棒のような二の腕でブルンブルンと音を立ててバットを振り回す凄まじさ。左打席のトップバッターがフルスイングで振り抜くと、打球はRF倉茂の所へ弾丸ライナーで飛んで行った。ヒヤッとして打球の行方を目で追うと、倉茂は足元が定まらずフラフラしながらも拌み取りしてアウトにしたが、その直後に顔を真赤にしながら私に向かって「馬鹿野郎、打たせるな！」と烈火の如く怒って叫んだ声が今でも耳に残っている。この強打を見た瞬間、早大選手の試合前の打撃練習の状況を思い出した。私より桁違いに速くて伸びのある投球を全選手が軽々と長打していたのだ。どうしたらこの猛者連中からの被害を最少限に食止めることができるか懸命に考えた。早大選手は主に速球を打つ練習を積んでいると思われたので緩い球、それも山なりの天から降ってくるような球は打つことがないだろうという読みが瞬間閃いた。そこで初回の第二打者からその球を試しに投げてみた。すると待ち切れないために打撃のタイミングがずれるのか高いピッチャーフライに、また時には煎餅のように押し潰され猛回転しながらサードゴロとなるなど、面白いようにアウトを奪うことができたのだ。私が早大の初回の攻撃を0点に抑えてベンチに引揚げると、出迎えた監督が興奮して「勝てるぞ！」と大声で叫んでいた姿を思い出す。しかし4回回りから私の投げる山なりの第一ストライクの球には全く手を出さず、球筋をじっくり見極める作戦に切替えてきたため、投球数が増え四球も出すようになった。四球で出塁すると、山なりの超スローボールのため走者は楽々と盗塁でき、得点圏に進塁したところで打たれて大量得点を与えてしまったのが4回と7回の2イニングだ。もし私なりに自信のあった制球力を頼りに直球、カーブ、シュートボールを駆使して早大の超弩球打線に立向っていたら、もっと大量失点をしていただろうから、超スローボールの投法は与えられた条件の中ではベストの選択であったと今でも自負している。記憶によれば打たれた安打総数は6。内訳は本塁打2、三塁打はセンターが目測を誤り突込み過ぎてワンバウンドで頭上を越された一打を含め2、単打はショートが当り損いのゴロを前進捕球せず内野安打とした1を含め2。与

えた四球6。左打席に入ったピンチヒッターから三振1を奪ったことも今では嬉しい思い出となった。一方乙幡投手はといえば大柄の早大選手の中でも一際大きな体の持主。体全体を使って投げ込む豪速球は唸りを立てながら打者の手元でグンと伸び一瞬のうちにキャッチャーミットに納まるため、農工大チームは只々三振の山を築くばかり。結局は11対0の完敗。ネット裏に多くの報道関係者が居並ぶ晴舞台で先輩の社会人野球チーム「全駒場」の純白のユニホームを借りて精一杯戦い、青春の一頁を飾った晴れがましくもほろ苦い思い出を同窓諸氏、特に後輩野球部員に紹介いたしたく筆をとった次第である。

農工大 000000000=0

早大 000501500=11

最後に文中の物故された方々に拙文を捧げ心から御冥福をお祈りし筆を置く。

東京農工大学同窓会宮崎支部の記念誌によせて

山本 泰嗣 (農学S57)

私は、大学入試が1期・2期制であった最後の年に農工大を受験しました。もともと航空大学校を志望していましたが、高校3年になって急速に近視が進み、空が飛べないなら地に這いつくばるかと・・・農学部を選択しました。

宮崎大学に合格していたこともあり、従兄弟(林産学科 岩切氏)を頼っての物見遊山の受験でしたが、学生寮の自由な雰囲気ですっかり惚れてしまい、合格するも判らないうちから、農工大に行くことに親に宣言した事を覚えています。

今の私からは想像できないかもしれませんが、高校までは大人しい・・・どちらかという根暗？な学生だったのです。

それが、たった、2日間の寮生活で、やれば何でもできる？！ってな感触を得て、入学式の前には、部屋に訪問してこられた空手部の先輩と酒を飲み(それまで、1滴も飲んだことが無かった・・・)入部していました。

言わば、農工大受験の寮体験が自分が自立するきっかけだったと思うし、両親からも未だに言われています。

大学では、良い友達・先生にも恵まれ、1年の時は、学ランに下駄、禪で(こんな学生は空手部にも2人しかいなかったケド・・・)、一般教養の伊藤先生の解剖学研究室で犬の神経標本を採ったり、ゼミで使うドイツ語の辞書をわざとボロボロにして持って歩いていました。

大昔の学生の姿に憧れていた訳ではなく(大体、知りもしなかったし・・・)、高校までとは違う自分を作りたいという気持ちに友達の誘いがあったという軽いノリが真相です。

残念ながら空手部は、練習のしすぎで膝をこわしてしまい挫折しましたが、バイクのレースやハングライダー、登山と本当に良く遊んだし、一方では、DNA螺旋構造を解明したワトソン・クリック博士の記念講演を聞きに行ったり、本を読んだり(宮崎に持って帰った本は1000冊を超えていました・・・)、世の中の何も知らずに出ていった田舎の少年をたくさんの友達や先輩が導いてくれたと思っています。

京王線に始めて乗って車掌に特急券を買っていませんと申し出たような失敗に始まり、たくさんの失敗を(未だにやり続けていますが・・・)経験し、そして、たくさんの人から許して貰ってきたことで、自分の中の怠け癖・無責任さとも上手につき合えるようになったのだらうと思っています。

今の自分の8割は農工大から貰ったものだと思います。今年、娘が宮崎大学の農学部に進学しました。田植え等の実習を楽しんでいるようですが、何時、自分に目覚めるのかナと・・・眺めています。同窓会の皆様、これからもよろしくお祈りします。

大学の思い出

富永 友紀子 (農学S41)

今から40数年前、横浜の高校3年のある放課後、友達と将来の夢を話している中で、深く考えもせず、「北海道の酪農家のおヨメに行ってあなた達に自家製のチーズやバターを送ってあげる。」と言ったのが農工大に進むきっかけだったように思います。

片道1時間半、梨畑の中を単線の南武線で通いました。桜が咲いたと言っては多磨墓地に花見に行き、雪が降ったと言っては高尾山に登りといっ

た思い出ばかりで、真剣に勉強した記憶がないのはこの年になると甚だ残念で、何ともったいないことをしたものだと思う今日この頃です。

北海道に行くつもりが南国に来てしまいました、多少なりとも農業に携わることができて夢の一端は叶えられたのでしょうか。ただ、夏になると北に行っていれば良かったなァと思うことがあります。

十年経って思うこと

松山 隆二 (林産H5)

同窓会の皆さん、こんにちは。記念誌発刊ということで、いい機会なので、私の大学時代を振り返ってみようと思います。

平成5年に林産学科を卒業して、もう何年も同級生と話すこともなく「皆元気にやってるだろうか」と思うこともあるけど、「まあ元気にやっているんだろう」と思い返しつつ毎日を過ごしています。

私は、はじめて農工大を訪れた時、正門から見た本館の様子がいかに大学という感じで「この大学に入りたいな」と漠然とした思いを持ったことをとてもよく覚えています。

大学時代、林産学科の仲間とは、学校であるいは校外でと本当にほとんど毎日顔を合わせていたように思います。

試験の時は誰かの家に集まって知恵を出し合い、冬は激安パックで新宿からバスに乗ってスキーツアーに行き、G1があれば府中競馬場に向かい、バイトは三鷹でやはり同級生と塾講師、卒論の時は研究室に寝泊まりしたりと、4年間、常に学科の誰かと一緒にいたように思います。

もう、10年以上も大学を訪れることもなく、私の頭の中には、当時の風景がそのまま残っています。

正門から見た本館の様子、広～い農場、大國魂神社の夏祭り、ケヤキ並木、東八(軍用道路)、府中駅周辺、府中競馬場、国分寺駅周辺、東小金井の工学部と櫛寮などなど、いつかは、家族を連れて、大学を訪れたいと思っているのですが、子供はまだ3歳なので、そのうち実現したいなと思っています。

宮崎県の同窓会には県庁に入庁した当時から参加するようになって、いつのまにか連絡員をする

ようになりました。

私が入庁した当時、10年ぶりに新会員が参加したと言われていたのですが、農工大卒の職員が県庁内にいないのかあるいはわからないだけなのか、私のもうすでに10年以上県庁職員の新会員を見つけていません。ちょっと寂しいことですよ。

火事で焼けた生協の顛末

森 房光 (林学S53)

私が入学した昭和48年当時は猛烈なオイルショックで学費が3倍になり3万6千円(月3千円、半年毎に納付)でした。それでも親父が高校の学費より安いと驚いたことを憶えています。

入学したらすぐ、サッカー部に所属しました。中学時代にやっていたので少々的心得はあったのですが、すぐに藤枝東出身者や関東選抜に選ばれた経験者などが先輩にいて、すぐに化けの皮がはがされ圧倒されました。

2週間ほどたった土曜日の午後、初めて飲み会の洗礼を受けました。OB会が催されハーフ3本程度の紅白戦で汗を流した後、グラウンドの隣にあった生協で飲み会が始まりました。新入生を「ロ」の字型の中に入れ、その周りを先輩がジャイアントのビール瓶やら一升瓶を持ってついで回ります。飲み会が終わった後、フラフラしている新入生は先輩が面倒を見てくれるのですが、体育館の床下や中庭の噴水で眠り込んだものや、プール脇で発見された部員もいました。今から考えるとぞっとします。

そのような部活を続けていた二年の春のことです。いつものようにOB会後の飲み会を生協でやって各自下宿に引き上げたところ、12時過ぎに府中本町の私の下宿に後輩が「生協が火事です」と起こしに来ました。そりゃ大変と駆けつけたところ、生協の隣にあった2階建ての合宿所から火が出ており、消防車が消火にあたっていました。翌日から3日間は部の幹部は警察やら消防やらに呼び出されて事情を聞かれて大変でした。

当時合宿所では柔道部も合宿中と記憶していますが、出火の原因は解からずじまいで、幸いにも食堂部分には火が回らずサッカー部には部活停止処分はありませんでした。そして我々が卒業する間

際に学生生協が新しくオープンしたのです。(結果オーライ?)

さて、昨年(平成16年)の春に同窓会用務で久しぶりに母校を訪問する機会を頂きました。正門からのケヤキ並木と時間の止まった時計台も健在でした。中庭の赤松やら広葉樹も立派に茂り、噴水などは周囲の道路から見えづらくなっていました。我々がお世話になった(燃やした?)生協は、文化サークルの部室に変貌し、隣には近代的な武道場が出来ていました。

何よりも驚いたことは女子学生の姿が多いことです。私が入学した年度にはじめて林学に女子学生が入学して、演習林のトイレや風呂をどうするかで教授会が開かれたと聞いておりますので、隔世の感があると感じたところです。

青春の5年間をすごした府中の地で変わらない農工大学のケヤキ並木や農場を散策しつつ、今年で50歳を迎えてこれまでの人生を振り返りながら、今後は健康に留意しながら、また新たな気持ちで次のステップに踏み出したいと考えているこの頃です。

ロボコン世界一への挑戦

北 光一 (ロボット研究会RUR第11代会長 機シスH19)

私たちロボット研究会RURは、2006年6月に東京代々木で開催されたNHK大学ロボコン2006において、念願だった初優勝を飾ることができました。NHK大学ロボコンは2002年からABUアジア太平洋ロボコンの日本代表選考会を兼ねているため、私たちは史上5番目の日本代表として、9月にクアラルンプールで開催されたABUロボコンに出場し、ベスト8、ベストアイデア賞受賞という結果を残しました。

RURは今年で創設13年目を迎え、数ある大学のロボコンチームの中でも長い歴史を誇り、NHKロボコン以外にもたくさんの競技会に出場しています。授業で学んだ専門知識を活用しつつ、実際に手を動かしながら試行錯誤し、技術を身につけるとともに、チームワークやマネジメントを学ぶ場となっています。実力は年々進歩しており、一昨年のNHKロボコンではベスト4・アイデア賞を受賞するなど、その活躍ぶりはテレビや専門誌でも多く取り

上げられてきました。しかし、NHKロボコンの優勝という創設当時からの目標への道のりは険しく、これまでに何度も全国の強豪大学の前に涙をのんできました。

今回、私たちは今年こそ絶対に優勝するという強い意志の下、過去のノウハウを結集し、寝る間も惜しんで日々製作を続け、これまでにない高性能なロボットを作り上げるとともに、メンバー全員でゲームに勝つための戦略について何度も議論を重ねてきました。その努力がようやく報われて、NHKロボコンの優勝に至りました。

ロボコンは日本で始まったものですが、今では世界中に広まり、競技人口で日本をはるかに上回る国もたくさんあります。そうした流れを受け、NHKの提唱により2002年から世界大会であるABUロボコンが始まりました。

ABUロボコンではそれぞれの国や地域から選抜されたチームが参加するので、勝つために要求されるロボットの性能、戦略はNHKロボコンよりもずっと高度になります。日本代表だからといって必ずしも上位に食い込むのは簡単ではありません。野球で日本やアメリカが強いのも同じで、ロボコンでも国民の間で人気があり、競技人口の多い国が国際大会でも強豪となります。実際には技術力と同等かそれ以上に、優れた人材と大学や国からの手厚い支援に基づく豊富な資金と広い活動場所が、ロボコンで勝敗を決める大きな要素となっています。競技人口の多い国はこの点で大変有利になります。NHKロボコンの終了後、全国たくさんの方から祝福とABUロボコンでの健闘を願った激励をいただきました。大学でも壮行会を開いていただき、激励の言葉とともにたくさんの金銭的な支援もいただきました。そうした期待を背負い、ABUロボコンで少しでもいい結果を出すために精一杯の努力をしてきましたが、残念ながらベスト8という不甲斐ない結果となってしまいました。悔しさと同時に、期待にこたえ切れなかったことを申し訳なく思います。

しかし今回ABUロボコンを通して、私たちは大変貴重な経験とノウハウを手に入れました。これを活かしてNHKロボコン二冠とABUロボコンでのリベンジを目標に、2007年の大会に向けて現在も日々の活動に励んでいます。

最後に、いつも私たちの後ろ盾となって支えてくださっている顧問の遠山先生ならびに機械システム工学科の先生方、ABUロボコンに参加するに当たってさまざまな支援をいただいた学長はじめ役員の皆様、学生課の職員の皆様、そして学生援助事業に基づく支援をいただいている同窓会の皆様はこの場を借りて改めて深く感謝申し上げます。今後とも皆様のご理解ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

ロボット研究会

URL:<http://www.tuat.ac.jp/~rur/>



横浜開港後の150年間と生糸の関わり

児玉 満男 (製糸S34)

平成18年の出来事

今年の3月末、横浜での生糸の検査と先物取引が、およそ110年のその長い歴史の幕をおろした。また関連して伝統のある横浜生糸問屋協会も解散した。一方、帝蚕倉庫も事業団の在庫生糸が無くなったこともあり、中区北中通の地を離れた。

一時、国の経済を支えた蚕糸業もその役割を既に終えており、産業構造の変化とは云え、関係者にとっては寂しさを禁じえない。

〈生糸の検査〉

横浜での生糸の検査は、明治28年(1895年)生糸検査所法の成立を受けて、翌29年(1896年)8月生糸検査業務が開始された。その後昭和元年(1926年)輸出生糸検査法の公布、平成10年の日本農林規格(JAS法)による格付けと変遷し今回の平成18年3月をもって全て行われなくなったことに

つながる。

生糸の検査は、今後神戸において、時限措置としてあとわずかですべて終了と聞いている。

〈生糸の先物取引〉

生糸取引の値決めの参考となる先物取引価格は、明治26年（1893年）取引所法の公布に始まる。これを受けて、横浜では、横浜四品取引所が明治27年（1894年）開設された。その後戦後の昭和26年の商品取引所法の公布により横浜生糸取引所、平成10年の前橋乾繭取引所との合併により横浜商品取引所と改称、出来高の減少によりこの度東京穀物取引所に吸収合併され、横浜での取引は閉鎖となった。

〈生糸問屋協会〉

横浜生糸問屋協会は、横浜生糸取引所の会員をもって構成されているため、横浜取引所の閉鎖に伴い、運命を共にせざるをえなかった。

開港から150年の推移と生糸のかかわり

横浜では、毎年6月2日を開港記念日と定め、開港を祝う式典、催しが行われている。開港は1859年（万延元年）、今年から3年後の2009年は開港150周年に相当する。このため主要国首脳によるサミットの誘致など大規模な催し、お祝いが計画されている。

開港から、『平成18年の出来事』まで、約150年間の横浜の生糸事情を振り返ってみると、

(1) 万延元年の開港の頃

開港当時の、横浜港からの輸出は、横浜税関（当時は神奈川運上所）の記録によると①生糸②蚕種③お茶が大部分を占め、特に生糸は、欧州の微粒子病の発生で大打撃を受けていたためと云う。

開港50年史によると、当時の輸出事情は相当混乱していたようだ。交易にうとい日本人に対し、長けた欧米人にシナ人まで加わり買い叩きが、また一旦値段が良くなると、国内生産者の粗製濫造でまた値引きなどいずれにしても買い手市場が続いたと記述されている。

(2) 生糸検査所法の発布

前述の生糸検査所法の発布（明治28年・1895年）は開港から35年後で、これは、生産量が増加し取引が盛んになったことと関連して仏、伊の製糸方法による良質生糸の輸出が強く求められてきたためである。

方法としては、仏から製糸器械を10台輸入し所内に取り付け、製糸方法の改良、検査結果を通じて品質の向上を図り、蚕糸の指導的立場を採るところにあった。

(3) 関東大震災と検査所の復興、帝蚕倉庫の創立

大正12年の関東大震災により、横浜市は壊滅状態となり検査所も検査不能に陥った。

政府は生糸貿易の重要性に鑑み、検査所の新築及び復興費として320万円、倉庫建設資金として180万円計400万円を予算化、議決した。また、倉庫は非常時以外の利用を当業者に任せることとして帝国蚕糸倉庫株式会社が創立された。

政府の予算措置については、震災の3年程前民間が行った糸価対策の共同保管が効果を挙げ、その益金から300万円の国庫納付金があつたため、政府の心証もよく早期に決められたことにつながったようだ。

(4) 横浜港における生糸の輸出貢献

内外の糸価および需給の動向等で差異はあるが、横浜港からの品目別輸出額では、生糸は、戦後の昭和26年まで、戦中を除いて約80年間トップを占めてきた。その後は1年置いて28年からは、自動車に座を譲っている。特に戦後における外貨の獲得には生糸は大きく貢献している。

(5) 輸出国から輸入国へ

30年代の後半は、欧州市場は日本にとって有力な輸出市場であったが、40年早々中国糸が急速にシェアを高め日本糸を上回った。日本国内においても48年になって、国産糸が逼迫し糸価が高騰したため、50年には中国糸が緊急輸入され、これを境に50年末には生糸の輸出量は皆無となった。

蚕糸政策の終焉と横浜

生糸の需給逼迫で、緊急輸入までしたのは昭和50年（1975年）頃までで、頼りとする消費の世界では、生活様式の洋風化、着物離れの加速等需要の構造変化が着々と進んでいた。次の5年間価格は低迷、絹の内需は3割減まで落ち込んだ。56年には基準糸価等政策価格をめぐって4ヶ月間抗争、60年には、事業団在庫は国内産1年分に相当する18万俵の滞貨、相当な累積債務、累積損失をかかえ、制度運営は苦境にたたされた。

平成10年の蚕糸3法の廃止等に至るまでのことは、本論でないので省くが、撤退するときの苦労は

並大抵のもので無かったと思う。

本論に戻って、横浜についてみれば、蚕糸政策が撤退を始めた昭和55年以降は、開港150年の尺度で見れば、後半の120年以降の30年間に相当する。

横浜は、行政の中心でないこと、また、生産地でも、消費地でもないため国の撤退政策に沿うしかなかった。検査所は職員の削減、規格検への吸収統合、取引所は出来高皆無、相場は政策相場で最低価格（買入価格）に張り付いたまま。時の蚕糸担当局長が元気の無い取引所に激励にいった。立会場の檯上で激励したため、ご祝儀相場を付け1円上がった。局長が本省に戻ったら後場1節に元に戻ったと云う当時では笑えぬ話もある。

開港150年のうち、国の経済に貢献したのは昭和26年までで、輸出の終わった昭和50年で役割が終わったと言えよう。生糸検査や取引所が平成18年まで続いたのは、役割は少なくなっても、組織を清算するにはそれ相当の期間を要すると云うことか。

たかが町工場されど町工場

田中 隆（機械院S57）

1976年4月、機械工学科に入学。クラブは準硬式野球部に入学。準硬の思い出といえば、夏合宿の〇旅館。同宿の埼玉大学と区別するために風呂場に大学名の貼り紙をしてくれたのは良かったのだが、「東京農耕大」。25年程前のこととは言え、ここまで知名度がないのかと……。今では年に1度のOB戦で先輩諸氏にお目にかかり、学生気分に戻って一杯も二杯もやるのが楽しみ。機械工学科4年次の卒論では斎藤安教授（森慎吾助手）の下、車両の操縦性・安定性を研究。斎藤先生は穏やかなかたで、研究の進め方・エンジニアとしての考え方を学び、今でも仕事に対する姿勢に生きている。

卒論発表では「内容はともかく(?)、発表態度が良かった。」とお褒めの言葉（これまた?）を頂戴した。調子に乗って大学院に進み、82年に修了。この年に大阪国立循環器病センタ研究所人工臓器部に研修生として配属。ここで人工心臓・駆動装置・血液循環シミュレータの製作・性能試験等に従事。



この間、センタ初の補助人工心臓臨床応用にエンジニアスタッフとして参加。86年に足かけ5年の研修を終え、父親が東京大田区で経営する(有)安久工機(ヤスヒサコウキ)に入社(安久は父親の出身地「宮崎県都城市安久町」に依る)。

会社のキャッチフレーズは「パタコーンから人工心臓まで」。業種・分野に関わりなく“来るものは拒まず”スタイル。長年培ってきた経験と技術をもとに複合技能を駆使して様々な難題に挑戦。横請けと言われる大田区ならではのネットワークを生かしてまとめ上げて行くのが特長。ちなみにパタコーンは折りたたみ式標識具(弊社特許製品)のこと。

仕事とは別に、小・中学生の見学・工場実習も受け入れているが、子供達はそれぞれ、町工場も捨てたもんじゃないと感じ取って帰って行く。

このとき、小生も満更ではない気分になる。

以前、大田区内小学校のロボコン大会の企画・製作に参加。担当のK先生がとても熱心で、小生も半分以上仕事抜きで協力。なんと農工大卒とのこと。

類は友を呼ぶ(?)。

町工場に来て20年、一昨年に75歳で他界した父親の後を継いで代表に就任。父親の遺した「人の繋がり」を肝に銘じながら社員6名で奮闘中。

現在は会社経営の傍ら、早大生命理工の社会人博士課程に在学し、ものづくりの立場からバイオエンジニアリングに貢献するのが目標。人の役に立つ「町工場発のすぐれもの」をこれからも開発して行きます。

業種・分野一切不問。アイデアお持ちの方は、小生までご一報を!

(有)安久工機HP: <http://www.yasuhisa.co.jp>

追伸: 業務連絡

機械科同期の皆様、今年も渋谷の「T」で一杯やりましょう!



団塊の世代に贈る

伊藤 道男 (林学S48)

千葉県のエコ職員として30数年目の春を迎えた。就職前は、時代の流れを越えて森林を育てるロマンあふれる仕事と勝手に想像していたが、実際の林業行政は、森林土木から金融まで幅広く、2次にわたるオイルショック、バブルとその崩壊と社会経済状況の変化に振り回されてきた。

また、野外が中心の仕事と思いきや、デスクワークに多くの時間を割かれる日々で、森林と直接触れる時間の少なさに物足りなさを感じている時、ふとしたきっかけで当時まだ珍しかった森林ボランティアの世界に踏み込んでしまい、あちこちのグループに顔を出すようになって20年近くたつ。

最初は、専門家として技術アドバイザー的なスタンスでいたが、やがて面白いことに気付いた。自腹で通ってくるボランティアには建前や肩書きは通用しない。教科書どおりに説明しても、現地にあった説得力がなければだれも振り向いてくれない。そもそも自然が相手の現場では教科書どおりにならないケースが多いことも実感できた。

また、立場や価値観の異なる人間が上下関係なしに集っているグループの合意形成には、いかに時間と手間と忍耐が必要か身をもって体験できた。

さらに、市民側に立ってみると行政側の思惑がほとんど見透かされていることが実感できた。行政と市民・企業のパートナーシップなどを標榜していても、どこまでが本音なのか、単なる建前なのか、自然にわかるから不思議である。

こういった経験は、全国初の「千葉県里山の保全、整備及び活用に関する条例」などの制度設計に携わった際に多少なりとも役立ったのかなと自負しているが、なにより直接の業務を離れて多くの知己を得たことは何事にも変えがたい。

現在、森林ボランティア活動は全国で数千グループを数える。環境意識の高まりと団塊世代の大量リタイアを迎え、今後更に盛んになると思われる。千葉県でも環境、子育て、街おこし、教育など多彩な視点や動機で、多くの団体・企業が里山活動や森づくりに取り組んでおり、今昔の感がある。

もっとも私個人に関して言えば、求められる役割

がだいぶ変わってきてしまった。メンバーが次第に森林を取り扱う知識や技能を身に付けるに従い、企画取りまとめ、規約作り、記録作成、会議運営といった面で頼りにされることが多い。なんのことはない、公務員の日常業務そのものである。なんだか一回りして元に戻ってしまった気もするが、期待された役割を黙々とこなすのが、性にあっているのかなと自分を納得させている。

多くの団塊世代が次々に地域に返っていく。「地域で通用するにはそれなりの場数が必要、習うより慣れろ、お早めに」とは、すぐ後に続く後輩からの贈る言葉である。



カプリ島と青の洞窟

鐘ヶ江 利常 (林学S34)

元気なうちに旅をしておこうと、今回の旅行は8日間のイタリア縦断ツアーでした。訪問地はナポリ、ポンペイ、カプリ島、フィレンツェ、ベネチア、ミラノ、ローマ等の順でお馴染みの地を訪ねるコースです。これらの中から、最も印象の深かった「カプリ島と青の洞窟」について記すことにします。

地中海の美しい楽園とか、ナポリ湾の真珠とかたとえられるカプリ島は、世界三大美港で世界遺産に指定されているナポリを満員のフェリーで早朝に出発することから始まりました。これは、行き先のカプリ島・青の洞窟の混雑を避けるためです。

さて、2千年前にポンペイを埋没させたベスビオ火山を左手に、ナポリの卵城やブルボン王宮、ヌオーヴォ城等の歴史遺産を右手に遠望しながらティレニア海を走ること30キロ、時間にして1時間余で海鳥の舞うカプリ島の北部に位置するマリーナ

グランデ港に滑るように入港して行きました。

接岸する船上から前方に視線を投げると、早朝の紺碧の海にカプリ島がぽっかりと浮かんで見えました。その港に続く緩急に富んだ丘陵には、パステルカラーや眩いばかりの白を基調とした家並みが連なり、ようやく地中海のリゾート地に到着したという感じが一入込み上げて来ました。

ここは、かつて、ローマ時代には皇帝アウグステスやティベリウスもカプリ島の自然美に魅せられ別荘を築いたほどの古くからのリゾート地でもあります。

家並みのあちこちにはブーゲンビリアの赤い花が咲き乱れ、それらの集落が途切れると、石灰岩からなる白みを帯びた岩肌の壮観な絶壁が続いていました。

湾内の一隅で青の洞窟行きの30人乗り小型船に乗り換え、20分程度で洞窟の入口に到着しました。

大地と水が創り上げた自然の芸術と称えられる青の洞窟の入口は、僅か1mの直径しかありません。再び数人程度に分かれ、手漕ぎ船に乗り換えました。漕ぎ手の話によると、我々の前の観光客は波が荒くて、2時間も待たされたのだから、皆さんは直ぐに入れてラッキーだと言うのです。ただし、無理して入ると逆に出不来なことがあると聴きました。

それでも、入口で順番待ちすることしばし、漸く狭い洞窟の入口で頭を低く身を屈めて無事にくぐる事が出来ました。

入口から先のドームは、もう暗闇の別世界でした。しかし、中ほどに進んで入口を振り返ると、光が奥に向かって差し込み、コバルトブルーともコバルトグリーンとも形容し難い、これまでに見たことのない神秘的でファンタジックな世界を創り出し、その自然の芸術の素晴らしさにいたく感動しました。

加えて、中に入っている小船各艘の漕ぎ手の歌うサンタルチアのバリトンが洞窟内に大きく共鳴し、ひと時の幻想の世界をより一層醸し出してくれました。私は、その光景にしばらく見とれていましたが、ふと我に返り慌てて暗闇の中でカメラのシャッターを切りました。

その後、狭い入口から明るい陽光のもとに出て、断崖の上にある小広場に待機する小型バスに乗り換え、青の洞窟通りと言われる車の交差もままならぬ幅の狭い道をゆっくり走り、瀟洒な別荘や住宅地のある高台のアナカプリに着きました。

そこで、カプリ島名物甘酸っぱいレモンリキュール

を試飲し、昼食には本場のピザに舌鼓を打って、タンゴの名曲で名を馳せた美しい楽園カプリ島に別れを告げました。

近況報告

森下 敏朗 (工化院S56)

野上先生におかれましては、長年にわたり同窓会の本県支部長としてご指導いただき、誠にありがとうございました。昨年の4月、西都原古墳群で開催されました全国植樹祭の式典会場からのテレビ中継において、野上先生が森林の機能や森づくりなどについて解説されております様子を拝見しました。宮崎を広く全国に紹介していただきましたことは、印象深く記憶に残っております。

私は衛生環境研究所という職場に勤務しており、2年目に入りました。水質関連の部署で、行政依頼としては、主に事業場排水分析や地下水の分析、そして、突発の水質汚濁事故に係る分析などがあります。最近ではダイオキシン類を分析する特殊分析施設が整備され、河川中のダイオキシン類のモニタリング調査も実施しております。ダイオキシン類分析は超微量分析で、1pg (ピコグラム: 1兆分の1) 単位です。1pgとは、東京ドームに相当する体積の入れ物を水でいっぱいにした場合の重さが約1012gです。このため、東京ドームに相当する入れ物に水を満たして角砂糖1個(1g)を溶かした場合を想定すると、その水1gに含まれる砂糖が1pg (ピコグラム) になります (*当所のパンフレットより引用)。ダイオキシン類分析は専門研修の受講が必要であること、そして、分析装置の運転に熟練と経験が重要であり、かつコンピュータにも詳しいことが求められるため、若い職員が担当しております。私は老眼鏡のお世話になりながら、一般的な分析に従事しております。

調査研究にも取り組んでおまして、水質関連では「底生動物による河川の水質評価」というテーマで県内河川を調査しています。川底にある石や木の葉等に住み着いているカワゲラ、ヒラタカゲロウやユスリカなどの水生生物を採集して、分類及び同定をします。河川の水質を評価するための指標生物が決められておりますので、調査結果を照らし

合わせて水域環境を評価します。理化学的検査も同時に行っていますが、検査項目の数値だけではわからない水環境の変化を底生動物調査により評価できるのではないかと考えております。なお、私は勉強不足で水生生物の分類及び同定はできませんので、もっぱら現地調査での機材運搬と生物の採集など肉体労働での参加です。

これまで底生動物調査は大淀川をはじめ、清武川、五十鈴川、酒谷川などで実施してきましたが、今年度から河川上流部の森林形態を考慮した調査に取り組むことになりました。後背地に針葉樹及び広葉樹の森林を有する河川の調査地点が必要となるため、5月末に宮崎大学農学部附属自然共生フィールド科学教育センターの田野フィールドを訪問しまして、高木先生にご相談してきたところです。野上先生が退官されましたあとに訪問することとなりましたが、今回、森様から支部会報の発行の連絡をいただき、縁があることを感じた次第です。フィールド内の一部を見学しまして、宮崎に住んでいながら意外と自然に接していないことを痛感した一日となりました。

近況報告というよりは、業務報告になってしまいました。同窓会会員の皆様には今後ともいろいろな形でお世話になる機会があると思いますので、よろしく願い申し上げます。

卒業後の状況報告

古野 優 (獣医院S62)

農工大を卒業して、早20年経ちました。振り返れば、学業は超低空飛行をくり返し、8年の長きに渡り大学にご迷惑をかけ続け、昭和62年にやっと獣医師の資格を取得させていただきました。卒業後は三重県職員として現在まで、家畜の伝染病の予防や衛生指導を中心に仕事をしています。

三重県に、就職した当初は吉野熊野国立公園のある自然豊かな熊野地域で乳牛や和牛の繁殖指導を中心とした業務をしていました。大学では、薬理学研究室で催奇形性の抑制をテーマにしていたので、直腸検査や難産介助等の仕事は大変新鮮に感じました。その後、2～3年ごとに転勤があり、主に豚の疾病浸潤調査や伝染病の予防業務をしてきました。

三重県は、家畜（乳牛、肉牛、豚、採卵鶏、肉用鶏）の飼養頭数は多くも少なくもなく、全国の平均くらいです。肉牛では、グルメ垂涎の松阪牛がいます。

三重県は、水産業も盛んな県です。特にマダイの養殖が盛んで、全国で2、3位の生産量を誇っています。釣り（波止釣り）を最大の趣味としている私は、5年ほど前から3年間水産研究部に配属されました。私を抜擢した上司は私をよく把握しているなど感心しました。水産研究部では、養殖魚（ハマチ、マダイ、ヒラメ、トラフグ等）の魚病の診断、水産用ワクチンの使用指導等の仕事をしていました。魚は変温動物で、冬場はほとんど摂餌せず大きくなならないこと、エラ呼吸をしており肺がないこと等は、後から思えば当たり前ですが、最初は大きな驚きでした。

水産研究部では、年間水温変動のデータや黒潮の蛇行等貴重なデータがあり、私の漁獲量（釣り）の増大にも大きく貢献してくれました。

昨年、再び家畜衛生の担当になりました。この冬も宮崎県、岡山県で高病原性鳥インフルエンザが発生しました。ウイルスが変異すると、人間にも容易に感染するようになるおそれがあるため、対応には非常に気を使います。2004年に発生した時は、大騒ぎになりましたが、今年の発生では、迅速に処分等の対応がされ、卵や鶏肉に対する風評被害も大きくはなりません。

従来は、家畜の伝染病は畜産関係者のみで対応をしていました。しかし、最近では国民の食生活に大きな不安を与え社会的にも影響の大きい家畜伝染病（口蹄疫、伝達性海綿状脳症（BSE）、狂牛病）、鶏インフルエンザ等の発生が見られ、国、県、市町村、畜産関係者全体として組織的な対応が必要となってきています。

社会人になっても、相変わらず低空飛行を続けていますが、少しでも県民のお役に立てるように今後も努めたいと思います。

運命的な出会いと私の最後の仕事か？

森 恵 (農工S39)

生産工学科、第一期生 (S39年卒) の私が、奇しくもS53年卒 (S55年院卒) の永田 謙二氏と国際協力のプロジェクトで一緒に仕事をする事になりました。しかも同じ研究室 (故鈴木先生で私は鈴木先生の最初の門下生) と言うのも偶然ではありますが確率的には出会いはかなり低い (宝くじで言う、当り1億円に相当すると自負する) ものであることを申し上げたい。と言うのも、私の同期は15名で、第一期生の中でコンサルタント海外業務を現役 (と言えるかどうかは別) として従事し、現地へ赴き現地調査等を行っているのは第一期生の中で唯一私だけである故です。そして、今後このような機会は先ず有り得ないと思うからです (なぜなら私の海外業務は本プロジェクトで終わりにしようと引け際を考えていたからです)。

前置きはこの位で本題に入りますと、たまたま2006年9月にJICA (日本国際協力事業団) の仕事で、当社が受注した「シエラレオネ国」の給水案件プロジェクトでJICAオフィスにて打合せがあった時、永田氏はJICA側から水分野の国際協力専門員としてミーティングに出てこられ、結局のところ、彼がこのプロジェクトの「団長」としての任をまかされ、先方政府と本プロジェクトに調印されることになった訳です。本案件は問題を多く抱える難しいプロジェクトで、当社のプロポーザルが確定されたものの、半年以上も契約実施が延期になっていた問題のプロジェクトであった訳ですが、この難しいプロジェクトを国内での打合せの段階から、現地へ入っても手際よく処理してゆく堂々とした態度には、長らくJICA業務に携わってきた私には、頼もしく、さすがしくも感じられ、実を申し上げると最近のJICA業務に辟易 (実務経験のない若い担当者が、マニュアルどおりの業務対応ばかりで、淡々と業務をこなすだけ故) していた私に、永田氏の存在が私に久々の快感を与えてくれました。

現地と一緒に案件をまとめた訳ですが、永田氏は、本案件で現地 (シエラレオネ国) へ入る前はモロッコの水案件をてがけ、その足でシエラレオネ国へ向かい我々と合流し、本案件を我々と一緒に現地調査

しまとめ、調印後更にタジキスタンの水案件形成に向かいました (三つのプロジェクトを掛け持ち)。

私も若い頃は永田氏のように精力的に嬉々として仕事をしていたのかな? と一瞬思いを遡ったものでした。

奇しくも日本の総理が小泉さんから50歳前半の安倍総理へと渡り、日本の総理大臣では初の若い総理と言われているおり、彼も正に50歳と聞き、老トルの私 (現時点で67歳、もう直ぐ68) には羨ましくも感じられると同時に年齢と体力の差 (特に海外業務に携わる者としてはこれ) をつくづく考えさせられました。本業務が約2年続きますので本業務の終わり頃は私も70歳に近づくことになるので、これが最後の仕事になるのではないかと思うと同時に、不思議にも天は私に私の最後の仕事のために「はなむけ」として良き後輩を差し向けて (こんな言い方をすると失礼と思いますが) くれたのではないかと何やら運命的な次元の出会いを感じる次第であります。永田氏の今後の更なる活躍を期待すると同時に、この紙面を借りて、先輩として、海外業務では「体 (健康)」が資本であり、仕事もさることながら、健康にはくれぐれも注意されることを唯一のアドバイスとしたい。



シエラレオネ国首都フリータウンLight House Hotelにて

富士山の世界文化遺産登録への課題

渡辺 豊博 (農工S48)

富士山は、昔から「聖山」と崇められ、登拝信仰 (富士講・浅間信仰) の本山であり、今でも多くの信者が全国各地から集まり、「懺悔懺悔・六根清浄」を唱えながら登山する「信仰の山」になっている。また、日量450万トンもの地下水が、富士山周辺に点在する静岡県清水町の柿田川や三島市の楽寿園小浜池、

富士宮市の富士浅間大社湧玉池や白糸の滝などに豊富に湧き出し、地域経済に恵みをもたらす「水の山」でもある。さらに、貴重で多様な動植物も多数生息しており、鳥類は日本の30%・100種類以上が生息する「自然の宝庫」なのだ。

しかし、富士山を訪れる年間の観光客は、周辺に1千万人、山梨県と静岡県との5合目には240万人、山頂には25~30万人となっており、世界最大の「山岳観光地」である。1964年に建設された富士山スバルラインなどによって、富士山五合目までの車両の乗り入れが可能となり、大量の観光客が気軽に訪れることができる「観光の山」に変身してしまった。

そのために富士山には、日本中で発生している多種多様な環境問題が凝縮し、問題化している。具体的な問題としては、登山者によるゴミの放置、し尿の垂れ流し、富士山麓における産業廃棄物の不法投棄の増大、地下水の減少、水質の悪化、放置森林の増大、貴重植物の盗伐、温暖化による雪崩の多発化、景観破壊、山麓開発の進行などがあり、それらが複合的・重層的に絡み合い、抜本的な解決の糸口が見つからない満身創痍の「傷付いた山」になっているといえる。

このような厳しい環境問題が進行する中で、現在までに数多くの環境NPOや山小屋、行政、関係機関などが、その解決に努力してきた。その結果、し尿問題については、すべての山小屋にバイオトイレが導入され、垂れ流しは激変した。また、登山者によるゴミの放置も、モラルの向上と環境NPOによる地道な清掃活動などによって今ではほとんど落ちていない。さらに、山麓部での産業廃棄物の不法投棄についても、監視カメラの導入やヘリコプターによる空中からの監視などによって減少している。まさに、富士山は、少しずつではあるが、本来の清楚で美しい姿を取り戻しつつあるといえる。

このような中で、2007年1月23日に富士山は、日本における「世界文化遺産」候補として暫定リストへの掲載が決定した。現在、7月にニュージーランドで開催されるユネスコ世界遺産委員会によって、正式に暫定リストへの掲載が国際的に認められることになる。これによって、富士山は世界の富士として、その位置付けが変わり、日本の宝物から世界の宝物として、より以上に厳しい国際基準に見合った評価と監視を受けることになる。



しかし、1994年に「世界自然遺産登録」への国民運動が展開されたが、国はユネスコへの登録申請を断念した経緯がある。断念した理由としては、ゴミやし尿処理対策の不備があったためだと言われているが、実際は抜本的・総合的な問題解決の見通しが立たなかったためだと私は考えている。

それでは富士山が今後、問題なく世界文化遺産に登録されるためにクリアしておかなければならない課題には、どのような事項があるのだろうか。以下、事前に調整・解決しておかなくてはならない事項を掲げる。1. 管理の一元化（責任者の明確化）、2. 長期的・総合的な管理基本計画の策定（開発・利用の抑止対策の確立）、3. 学術的・専門的な資源調査と評価の差別化（文化・自然遺産の普遍的価値の調査研究）、4. ゴミや産廃問題解決の具体策の確定、5. 富士山再生の恒久的基金の創設、6. NPOとの協働関係の構築、7. その他（富士山の保護範囲・コア、バッファゾーンの確定、防衛省施設との調整）など課題は山積みである。

世界遺産登録の目的は、「開発の抑止」であり、今後、利害者には多くの制約が新たに付加される。世界の宝物としての評価を受ける代償としては、国際基準による厳しい保全のセフティーネットが、富士山全域に覆われることになる。登録されることを優先した「器・形」を創る運動が先行する中で、50年~100年先の富士山を、どのような保全対策によって守っていくかを考えるために、さまざまな利害者が集まり、議論・検討することが重要であり、まずは地域住民や利害者の合意形成が先決となる。今、行政先行・依存型から市民主導型の登録運動への切替えが求められている。

愛媛県下の蚕糸文化財

重松 正矩 (製糸S32)

大正10年代の愛媛県は、西日本一の蚕糸県であったのでさほど多くはないが、今なお愛媛蚕種(株)日進館（社長の兵頭真通氏は同窓生）とおおず赤煉瓦館を双壁とする貴重な財がある。紙面の都合上その主要建造物のみを示すが、蚕糸業の急速な衰退に伴い蚕糸OB等の応援を得て文化財の発掘・解説・評価・保存等が必要なことを痛感している。（伊予市文化財保護審議会委員 学芸員）



愛媛蚕種(株)日進館（国の登録文化財）

・愛媛県下の主要蚕糸文化財建造物

施設（元施設名） 今の使途 場所 竣工年	構造 面積 機能等	特 長	文化財としての価値
愛媛蚕種(株)日進館（蚕種製造、稚蚕飼育等） 八幡浜市保内町川之石3番 明治後期	木造2階と3階建 219㎡ 事務所 蚕種貯蔵室蚕室	建物は傾斜地を生かして機能を分け、蚕種の貯蔵室、蚕室等が配置されて、3階と2階とをうまくつなげている。蚕室は組立、分解が容易。	第1、2蚕室は国の登録文化財の指定を受けて、現在も使用されている。蚕糸文化財としては、全国的にも最高級の建造物と思われる。
おおず赤煉瓦館（大洲商業銀行の繭保管倉庫〔抵当物倉庫〕多目的使用） 大洲市大洲 明治34年	煉瓦造木造瓦葺2階建 本館258㎡ 本館付属28㎡ 北倉庫314㎡ 南倉庫40㎡	老朽化が激しいので平成3年に改修工事に着手し、明治の意匠を甦らせた。現在事務所、売店、ギャラリー、研修室、倉庫等に使用中。	平成3年に大洲市の有形文化財に指定された。同館ネットワークは全国に34団体、約1300人いて、地域活動をしている。
柘田商事（女性の学舎をもつ柘田製糸場で、今は個人住宅と物置） 大洲市若宮 事務所等は正7年 講堂は昭和10年	講堂は木造平屋建、真壁造の百畳敷で、主として従業員の研修、花嫁修業（華道、茶道、和裁等）等に使用されていた。	昭和3年の従業員は男子13名、女子104名で、個人経営から出発した製糸場としては、大規模である（所有者は元大洲市長の柘田与一氏）。	明治、大正、昭和と続いた愛媛を代表する柘田製糸場(株)の建造物で、当時の県下製糸業の隆盛を知る貴重な遺産である。

ハンセン患者の人間回復・社会復帰のため 「らい予防法」の廃止を訴え闘った作家・島比呂志の功績

清野 光一（獣畜S20）

島比呂志（本名・岸上薫）は、戦争中20代半ばにして学生を指導する研究者であった。

昭和15年3月（1940）、東京高農（現東京農工大）獣医学科を卒業、旧満州の大陸科学院で動物細菌学を研究したあと、昭和18年4月（1943）、母校の助教授として迎えられた科学者だった。将来バクテリアの研究で学位をとり、海外留学の夢をいっていた。しかしその夢は、まず戦争によって、次にはハンセン病の発病によって完全に打ち砕かれてしまった。家族、知人の方々を差別の渦中に陥れないため、戦後まもなく社会から、また学校から突然姿を消された。

それから半世紀余、鹿児島島のらい療養所の人となる。明治時代から施行の「ライ予防法」下、多くの患者が強制的に隔離され、人間としての尊厳を奪われている現状をみて、苦悩の末、ハンセン病患者の人間回復と、社会復帰のため、ペンを武器に社会に向け執筆を決意した。

昭和33年9月（1958）、同人誌「火山地帯」を創刊し、ペンネーム島比呂志の名で編集・発行人となる。以後「火山地帯」を発表の場として、小説、評論、詩、エッセイなどの創作活動を続ける。日本のらい病対策は、明治40年（1907）、法律第11号「ライ予防ニ関スル件」や昭和28年（1953）の「らい予防法」を見ればわかるように、一貫して隔離主義が骨子となっていて、「伝染病予防法」と何ら変わるところがない、強制検診、強制収容、患家の消毒、焼却だった。

しかし、近年らい医学の進歩は目覚しく、療養所の入所者のほとんどが無菌治療（臨床的）している状態の中、「らい予防法」の見直しが問題になってきた。

戦後、新薬プロミレが、らい治療の特効薬として出現。らい菌は発病力が弱く発病しても適切な治療により、治療する病であることなどが証明され、WHO（世界保健機関）は、外来治療を主体にすべきという指針を発表した。

また、昭和31年（1956）に開催されたローマ会議（ライ患者の救済と社会復帰のための国際会

議）では、らいに対する一切の特別法の撤廃が決議され、日本の隔離主義はきびしい批判を受けたこともあり、「らい予防法」の存在理由は、どこにもないことが明白になってきた。

平成7年4月（1995）、日本らい学会はその総会において、長期にわたって現行らい予防法の存在を黙認し、強制隔離を容認してきたことを反省し、この法律の廃止を求める見解をまとめた。島はこのような見解の文章に接したとき、やっと、ここまで来たかとの感慨に胸が詰まり、何の関係もない、母校の校歌の「偉人の愛を語る時」という一節を呟いていた。

らい予防法廃止を求めたこの見解は、やがて法曹界、所長連盟（国立13療養所の所長会）、全患協（全国ハンセン病患者協会）にも伝わり合意を得て、念願の法改正にこぎつけることができた。平成8年4月1日（1996）、らい予防法の廃止に関する法律は成立、施行となった。明治40年に制定されてから90年に及ぶ、ハンセン病への差別と人権侵害については、一応の終止符がうたれたのである。

らい予防法の廃止に伴い長期的強制隔離政策によって、激しい人権侵害を受けてきた、元ハンセン病患者たちは、平成10年7月31日（1998）、熊本地裁に日本で初めて国家賠償法に基づく訴状を提出。原告13名、島は原告団名誉会長に就任する。これを機に各療養所の元患者たちが次々と訴訟に立ち上がる。同地裁は、平成13年5月（2001）、ハンセン病国家賠償訴訟は勝訴判決される。

小泉内閣は、これを受け控訴を断念し、平成14年1月（2002）、和解の基本合意が調印された。この動きは、東京、岡山の訴訟に及び、また訴訟に参加していない元患者にも賠償が認められた。平成13年11月6日、喜代子夫人を亡くしたあと、体調をくずし入退院を繰り返したが、懸命のリハビリで回復、社会復帰満3年を迎えた。翌年2月、肺炎で入院。平成15年3月22日静かに永遠の眠りにつきました。享年84歳。戒名安養院釈馨功。静岡県の富士霊園内「文学者」の墓に納骨。

島比呂志は、長年にわたって国のハンセン病政策の過ちや元患者の人権回復を訴え続けてきました。こうした熱意が、らい予防法廃止やハンセン病裁判の勝利に結びついたと言ってしまうのではない

でしょう。

著者に「生きてあれば」（講談社）、「奇妙な国」（新教出版社）、「来者のこえ」「らい予防法と患者の人権」「生存宣言」（社会評論社）などがある。

不思議な東京農工大学同窓会東京支部

馬場 信行（林学S35）

学生時代から県人会というのがあったが、私のような東京都人には何の集りもなかった。卒業してからも母校が近いのと山岳部に居たので部室があり、会合もありであまり同窓会の事は考えなかった。面倒くさがり屋なので同窓会費も終身会費を払い、農工通信が来たり名簿が来たり何もなくてもいろいろな情報が入って来た。農工通信には県支部の事が書いてあり各県もよく纏まっているなどと思う程度だった。

もう10年以上前になるであろうか、先輩たちが同窓会に東京支部が無い事に気がついた。支部が無いことは集まりがない事である。東京の人間も集まって飲みながら話をする場を持つという話ももち上がった。たまたま新宿中村屋（カレーライス）の社長の宮内さんが農工大出身だった。話をした所、火曜日は比較的空いているので会合に使用して下さいとのことであった。今も続いている「けやきクラブ」の発足である。来られる可能性のある人に案内を出した。毎月20人位参加した。会長と事務長の発案で飲み放題食べ放題3,000円で中村屋と話がついた。

最近になって各県に支部があって東京に支部がないのはおかしいという話が出た。考えて見れば学校が東京にあって100年以上経つのに同窓会東京支部がないのは不思議なことである。本部が支部の代行までしてくれてはいなかった。毎月第3火曜日の午後6時から8時まで3,000円の会費でいろいろ喋る「けやきクラブ」が擬似県人会とすれば、これを発展させて東京支部に格上げしようという話が出た。紆余曲折を経てやっと東京支部が立ち上がったのは先輩の汗の結晶であった。8,000人もいる同窓支部員をまとめるのはどうしたらよいか。会費を頂く案内状を出す金もない状態であった。好事魔が多く立ち上がり力を尽く

してくれた澤渡（サワド）先輩（林S33年卒）が他界した。更に追いつけをかけるように初代同窓会支部長になった細溪（ホソタニ）さんの息子さん急死され、ご自身の都合もあり突然立ち上げたばかり支部長をおりることになった。他界した先輩は「けやきクラブ」会長であり東京支部の重鎮でもあった。二つの会の役員が居なくなりピンチになった。政をなすは人に在りで何とかしようと有志が立ち上がった。幸いなことに昭和43年農業土木卒の山本賢さんが「けやきクラブ（会長はS43年農業土木卒の渡辺さん）」と「同窓会東京支部」の事務長を引きつぎ兼任してくれることとなった。キャップがない会はないというので彼のミコシに乗ることになった。同窓会東京支部は船出をしたばかりで人数が多く、金銭的には詰まっているので同窓会々員の力を借りて少しずつまとめていかなければならない。

申し遅れましたが昭和35年（1960）林学科卒の馬場信行です。IT時代に古希を迎えた年齢では少し無理なので次の世代が引き受けてくれるまでの中継ぎということで使命をはたしていきます。

同窓の皆様のご援助ご協力をお願いします。ご意見ご希望を事務局宛お送り下さい。「けやきクラブ」へもおいで下さい。会話を楽しみましょう。（中村屋4階「ラ・コンテ」にて毎月第3火曜18：00～20：00＝現在は費用ワリカン制）

同窓会支部活動における2つの焦点

村松 梅太郎（獣医S39）

私は今年度の総会で栃木県支部長に推薦された。新卒で栃木県に奉職してから3代の支部長にお世話になったが、そのどなたに比べても小粒であることはなほだしく、とうてい適任とはいえないのであるが、これもなにかの巡り合わせとお引き受けいたしました。

さて、栃木県支部の現状をみると、支部活動は少なくとも数の上ではおおきな拡がりを見せていないことである。言葉を換えると同窓会の一部の協力者によって担われ、若い世代の掌握には成功していないと言って大きな誤りはないであろう。そもそも同窓会活動とは何か、その求心力をどこ

に求めるかといったところから議論を進めなければならないが、そのような論議を経て統一的理解に到達することは現在ではかなり困難になってきているように思われてならない。筆者が卒業した頃の頃は、同窓の人脈を介して参加者が何らかの利益に与るということも同窓会の効能のひとつというのが共通理解のひとつであったと理解している。自らのアイデンティティの確認と、相互扶助の場を提供することも同窓会の重要な役割であることにいまも変わりはないのだが、それだけでは現代の若者のハートを射止めることはできないのかもしれない。

しからは、何を標榜して我々は進むのか。先述の3支部長は高邁な理念、社会的信用、卓越した指導力をもって、それぞれの時代にかなった支部活動を展開してこられたのであったが、そのいずれにおいても見栄えのしないこの新米支部長は「さて、どうしたものか」と思案に暮れている。

筆者は栃木県職を定年退職後、ある獣医系私立大学で教鞭をとっているが、その同窓会長が卒業式で「同窓会の原動力は卒業生の母校愛に支えられています」と祝辞を述べられた。つまり私立大学では同窓会が何をしてくれるかではなく、同窓会を通して母校を支えることが求められ、そのことが逆に同窓会活動に生氣を与えている。同窓生一人一人にとって『母校愛』とは何かを各自が自らに問いかけるところから始めることによって支部活動に活性化する何かを生み出すことができるであろうか。少なくとも一人ひとりにおける受動から能動への内的転換なくして支部活動の進展は期待できないであろう。

とは申せ、1つのキーワードを提示することによって性急で目に見える効果を期待できるということでもあるまい。当面は折を得るも得ざるも、孜孜として同窓会活動を継続してゆくことも求められている。『継続は力』と信じて……。『母校愛』および『継続は力』を楯円なる栃木県支部活動の2つの焦点としてとりあえず支部の皆さんと力を合わせてゆきたい。

(筆者：栃木県支部長、元日本獣医生命科学大学教授)

自己紹介

大橋 統州 (農学S54)

青森県支部の同窓会親睦会では、毎回支部長あいさつと乾杯の後に、酔いが回らぬうちに出席会員の自己紹介を行ってきました。

出席者は、常名出席される方、初めて出席される方、何年あるいは何十年ぶりに出席される方、県外在住で帰省された機会に出席して下さった方、県外からの転勤で青森に勤務されている方など毎回20名位の参加に落ち着きます。これまで参加しなかった方が参加されたときは、幹事としてほっとします。

自己紹介では皆さん個性が表れ、軽いあいさつにする方と近況報告を兼ねて挨拶する方がおります。特に久しぶりに出席される方や初めて出席してくれた方、「退職前にやっと出席しました」という方々のあいさつは思いがあふれ、感激することがしばしばあります。

また、民間に就職された方は、全国を歩き様々な職種にも就いていることから珍しい話題もあって、続く宴会の話題にもなり、同窓会の楽しみのひとつです。

自己紹介は席順で順番に行いますが、一回りするのに1時間近くかかりますので、タイミングを誤るとせっかく盛り上がった宴の腰を折りがねません。

前回の同窓会(平成16年度)は3年ぶりの開催ということで、久しぶりの談話に花が咲き、乾杯後すぐ宴たけなわとなりました。そこでこの自己紹介を始めたため宴会も一度仕切り直しとなり、3時間近い親睦会も皆さんまるで語り足りなかったようで、幹事としては冷や汗をかいたところです。

今回の同窓会(平成18年度)親睦会は、乾杯の後、34年間支部長を務められ同窓会本部より感謝状が贈呈された前三橋支部長への感謝状授与を行いました。遅刻された方もおり始まりが少し遅れたため、支部同窓会親睦会では初めて自己紹介を省いての宴会となりました。

また、今回は常連の方で欠席した方が多く、いつもの顔が見えないで寂しいとおっしゃる会員もいましたが、同じく寂しいものを感じました。

なお、青森県支部では、最近の新会員は工学部

出身者が多いのですが、公務員関係は農学部出身者が多く、工学部出身者はほとんど民間企業に就職するため、今のところ同窓会への参加は少数です。



平成18年度 東京農工大学同窓会青森県支部親睦会 (H18.11.25)

北海道支部長就任にあたって

西村 弘行 (農化S42)

全国的な暖冬は、北海道でも例外ではなく、比較的雪が少ない年でしたが、農業に与える悪影響がなければと少々心配しております。日本の食料自給率がエネルギーレベルでおよそ40%といわれる中、北海道のそれはおよそ200%で、名実共に本道は日本の食糧供給基地となっています。日本政府は戦後最長の「いざなぎ景気」(1965年11月～1970年7月)を超え、全国的に景気がよくなっていると言われるものの、道内経済は依然低迷を続け、完全失業率も全国ワーストのトップです。

このような現状下で2006年12月2日同窓会北海道支部総会が札幌市内で開催され、新任の支部長として私が選出されました。副支部長の長谷川周一氏(農工S46)と共に事務局長の宇野沢正美氏(農工S46)が支部の運営に当たってくれるため心強く感じております。私の職歴は、昭和44年より19年間北海道大学農学部にて在職し、昭和63年より札幌市内にある北海道東海大学工学部教授として今日に至っておりますが、同時に現在、学長をしており大学運営と教育・研究活動などで超多忙な毎日を送っております。特に大学発ベンチャーを3社起業し、全て経営責任のある役員をお引き受けしておりますが、およそ10年前から創業したため、北海道内では『大学発ベンチャーのフロントランナー』と行政サイドから呼ばれています。おかげで3社共に売り上げを伸ばし、北海道の

地域経済活性化に貢献しています。このベンチャービジネスで経験したことが大学の学長として大学経営の方針を構築することに少なからず役立ちました。

さて、北海道は農林水産業を基幹産業とする経済構造で同窓会北海道支部会員は多かれ少なかれ関与していると言えるでしょう。ところが、豊富な農林水産物を保有しながら、経済低迷を続けているのは、一次産業にあまりにも特化している為に、資源の高付加価値化に遅れをとり、安い原料を供給するだけの基地であったためと考えられます。すなわち、道内農林水産資源の高度活用を産学官連携で実現することこそ北海道経済の活性化を実現できる唯一の道であると考えます。

現在の勤務先の大学では札幌校舎を昭和63年に開設するのに伴い、財政再建団体入りした夕張市に大学の農場(夕張バイオ試験農場)を設置し、当時の学長より農場長を任命され、今日まで続けております。本農場は、夕張市の経済活性化に協力する目的で市財政で建設していただいたもので、これまで成果が期待されておりましたが、おかげで、ギョウジャニンニク、チコリー、ヤーコン等の栽培と事業化に成功し、自ら起したベンチャー企業の加工場を農場の隣接地に建設するまでに至りました。財政破綻をしている自治体の再建には、産学官金民の連携によるベンチャー企業化で雇用を創出する以外にはないと私は考えています。

母校で学んだ科学技術と同窓生の知恵の結集で地域産業経済活性化に貢献できないものかと日々考える今日です。ともあれ、任期中は、同窓生役員と北海道支部会員共々支部活動の活性化に努力致したいと存じます。



北海道東海大学夕張バイオ試験農場(農場長:西村弘行)で栽培されるギョウジャニンニク(ネギ属活用で2006年度特許庁長官奨励賞受賞)

農工大同窓会を振り返って

井上 新三郎（農工S54）

私たちの頃は、農学科、農芸化学科、環境保護学科、獣医学科、農業生産工学科、林学科、林産学科があり、40名程／学科／学年と大学院生ではなかったかと思えます。それぞれ卒業生は、当時、所属する学科名に懐かしい響きを感じておられるのではないのでしょうか。そして我々の時代は、それぞれの学科が目指すものが学科名でイメージでき、それなりにマッチしていたように感じられます。

その後、大学の総合化、カリキュラム等の見直しにより、学部学科の再編成が行われ、私達が所属していた学科名も様変わりし、後輩達に出会っても「昔のどの学科に相当するのか、すぐには分からない事態を招いているのは、決して私だけに限られことではないでしょう。」時代は確実に移り変わり、私も確実に年を取ったのだ。・・・と自覚させられるこの頃です。

さて私事、昭和54年に農業生産工学科（農業工学）を卒業すると同時に帰郷し、宮崎県庁に入庁しました。知事選の影響で6月いっぱい長い初任者研修のあと、7月に都城市の土地改良事務所配属となりました。その年の9月16日から第34回国民体育大会が県総合運動公園を主会場に開催され、いろいろな行事の応援要員として駆り出されたことなどが蘇ってきます。

偶然にも義理の兄（S50農学科卒井上正次氏）が同じく農工大の卒業生であったため、同窓会にすぐに出席するようになりました。この間の同窓会の交流において、昔や現在のキャンパスや大学周辺のように、移り変わりを知ることができました。

また学生生活の様子などを楽しく語り合ったり、同級生や友人、知人の情報を交換したり、駒場小唄や寮歌などを歌ったりしているうちに、アツという間に26年が過ぎていました。

私にとって、先輩、後輩は大変ありがたく、初対面でも永く会っていなくてもどこか懐かしく、旅先に同窓生がいらないか名簿を調べ、訪ねたり訪ねられたりしながら酒を酌み交わし、だいぶ飲ま

せてもらった散財させたなど、帰郷後に産物を送ったりしながら、これからも旧交を温め続けて参りたいと考えています。

私の中では「農工大は永遠に不滅です。花の生産工です。」

同期会に出席して

生垣 博之（織工S34）

平成17年の同期会が5月30日、沼津で行われた。

我々、昭和34年卒業の繊維工学科は25名の少人数だったが、平成元年から毎年同期会を開いている。物故者が2名出たが出席者は例年15名前後だ。現役時代は仕事の関係上、出席率が悪かったが、70歳の大台に乗ると年に一度の集まりが楽しみになっているようである。

小生は平成8年に定年を迎えたが、そのころから不治の病に取り付かれて2年間は病院回りに明け暮れていた。その間、動作が極端に鈍くなり右手の握力が段々無くなっていった。人の勧めもあり宮崎の総合病院の神経内科の先生に診断を受けたところパーキンソン病（以下PD）ですと言われた。その時は病名は聞いたことはあるが実態は何も知らなかった。厚生省指定の難病であること、進行性であること、国内に13万人くらい患者がいること、高齢者に多いこと。気持ちが滅入って何もする気になれず、眠れない夜が続いた。

このままではPDという名前に負けてしまうと思ひ、趣味を見つけようと思ったが、定年後はゴルフに明け暮れる計画だったから、そう簡単に見つかるものではない。今はそれでも下手な囲碁と趣味づくりで水彩画教室に通っている。

平成13年には東ヨーロッパ、14年には中国旅行を妻と妹の助けを借りて行くことが出来たことから、段々自信がついてきた。今までは同期会にも行く気がしなかったが、3年前長野県の飯田の天竜下りの計画があり妻に東京まで同行してもらって、出席することが出来た。懐かしい面々が「よう生きとったなあ」と歓待してくれた。

あれから3年。今回は出席を随分迷った。2年前に良かれと思ってやった脳の手術で言語障害が

加わり、出席しても意思の疎通が出来ないと思ったからである。しかし、今回会っておかなければ来年また会える保証もないと自問自答しながら出席を決意した。出席者の中に四年前に肺ガンと告知され半年の寿命といわれた友人がいた。いつも冗談が好きで人を笑わせていたが、今回は時折見せる寂しそうな横顔が気になった。自分が彼の立場であったら、出席したのだろうか。

帰り際に来年もまた会おうと握手したが彼の握手には力が入った。

サッカー部 第2期黄金期同窓会

名須川 厚 (獣医S37)

2006年サッカーW杯の年、農工大サッカー部サッカー部再興47年目にして第2期黄金期のメンバー13名が紀州鉄道熱海ホテルに集結した。平成18年5月28日のことである。

農工大卒業後、実に40数年の時を経て旧交を温め、関東大学リーグ3部優勝時(得点27点、失点3点)の思い出へと遡り、チームイレブンの戦う姿勢が一つにまとまった時にこそ大きなパワーが生まれることを語り合った。

近代サッカーのスマートな戦略と高度なテクニックは見る者を魅了するが、最後にゲームの勝敗を決するのはチームワークだ。この点は今も昔も変わらない。かつて連勝街道(10連勝)を突っ走ったあの時のイレブンの絆は今も我々の間に繋がっている。

サッカーとはそれほど素晴らしいスポーツである。こうした気持ちが農工大サッカーの伝統の礎として後輩のサッカーマンへと受け継がれて行くことを祈念し、夜明けまで盛り上がり語り明かした楽しい会合であった。

(昭37農学卒平林、農化卒藤吉、獣医卒名須川 記)

[主な成績—昭和36年度]

三大学(旧三繊維大会)優勝

理工系大学リーグ 準優勝

(優勝東工大 延長1:2)

関東国公立大会 3位(優勝教育大)

関東リーグ3部Aブロック 優勝

(決定戦対青山学院大3:1)

天皇杯

一回戦敗退

(対東北学院大(ベスト4進出)0:2)



(現役当時)



現在(同窓会)

岩崎徹氏(農S42)が 2006年度JRA賞馬事文化賞

近藤 康二(農学院S60)

1967年農学部農学科卒業の岩崎徹氏(現札幌大学経済学部教授)が、2006年度JRA賞馬事文化賞を受賞されました。

JRA賞は、毎年度、その年度に最も優秀な成績を収めた競走馬や騎手、調教師を表彰する賞としてよく知られています。

しかし、この馬事文化賞はこれらのJRA賞とは性格を異にしている、文学や映画など、文化的な活動により馬事文化の発展に顕著な功績のあった方を対象に日本中央競馬会(JRA)が表彰するもので、競馬に限らず広く馬に関係する活動を対象としています。そして、この表彰は1987年度から続けられており、2006年度は記念すべき20年目の節目に岩崎氏が受賞されたこととなります。

今回、岩崎氏が受賞したのは、2005年11月に出版された氏の著作「馬産地80話—日高から見た日

本競馬-」(北海道大学出版会)が高く評価されたことによります。馬事文化賞選考委員会ではこの著作を、「困難な局面にある北海道の場産地の過去と現状を踏まえつつ、提言を行なったもので、馬産地の将来を懸念しつつ、希望を失わずにアイデアを求めるという姿勢で書かれている。」と評価しています。

「馬産地80話」は、岩崎氏の専門である農業経済学の視点から、現在の日本競馬と馬産地の現状と課題を的確に分析し、今後の競馬や馬産地のあり方について提言を行なったものです。氏は、1976年の札幌大学赴任後、教え子に日本でも最大の馬産地日高出身の学生がいたことなどから、ゼミの調査で日高に入ったことをきっかけに馬に関係することとなりました。その後、1977年から中央畜産会がJRAの委託を受けて実施している軽種馬生産費調査など軽種馬生産経営に関する各種調査に携わり、以来JRAの委員会の委員や北海道競馬運営委員長などの仕事をされ、その中で競馬と軽種馬生産について社会科学の専門家の立場から貴重な提言をされています。そして、2002年6月には、それまでの軽種馬に関する研究成果を「競馬社会をみると、日本経済がみえてくる-国際化と馬産地の課題-」(源草社)として取りまとめられており、現在では、軽種馬生産や競馬に関する経済学分野の第一人者といっても過言ではありません。

受賞対象となった「馬産地80話」は、農業経済の立場からの現在の軽種馬生産や日本競馬の課題を分析したものではありませんが、いわゆる研究書・専門書ではなく、競馬ファンをはじめとする幅広い読者を対象としたものであり、大変読み易くまとめられています。そして、読み易い中にも、日本経済全体の動きを十分に把握した上で、日本経済の一環としての競馬と軽種馬生産の課題を鋭く指摘し、JRAなど競馬施行に携わる者に対しても率直な提言をされています。そして、バブル崩壊後の日本経済の不況の影響で、深刻な経済危機にある馬産地日高の再編(「馬を中心とした総合産地の形成」)のために、「日高パスポート」の実現など、夢を持った提言をされています。

ここで、私事に関することですが小生と岩崎氏の関係を紹介させていただくと、小生が現在の職

場、中央畜産会に就職して4年目の1988年から軽種馬に関する調査を担当することになり、その仕事を通じて岩崎氏にお世話になることとなりました。氏と同行して日高に入り、軽種馬生産経営に関する実態を調査する中で、氏の軽種馬生産や競馬に関する研究者としての熱い情熱を感じるとともに、現場の実態に基づいた問題点の把握、それと社会全体との関わりを考える姿勢を学ぶことができました。今回の氏の馬事文化賞受賞は、我々のように、現場の生産者と直に付き合うことを仕事にするものにとっても大きな励ましとなるものです。

なお、馬事文化賞の授賞式は、1月22日に東京で行なわれましたが、同時に行なわれた年度代表馬(ディープリンパクト)や騎手大賞(武豊)などJRA賞の表彰式を一競馬ファンとして純粋に楽しんでこられたとのことでした。



写真左から、鈴木邦則(全国公営競馬主催者協議会 林科S51卒)、岩崎徹・則子夫妻、益満宏行(JRA競走関連部長 獣医科S51卒)、有吉正徳(朝日新聞東京本社スポーツ部、植防科S55卒)、他に農工大卒の調教師は3名、JRA関係者は数知れず、ひとしきり同窓生が集まり盛り上がりました。



同窓会創立50周年記念事業の推進

平成19年5月26日(土)開催の総会・理事会において、同窓会創立50周年(平成24年)を迎えるにあたり、大学と合同で記念事業を行うことが承認されました。

今後、大学との合同記念事業検討委員会において、具体的な募金活動等の内容について審議されてまいります。また、同窓会としては、「記念事業計画企画委員会」が設置されておりますので、この委員会において事業内容・規模等の審議をお願いすることになります。会員の皆様方には、合同記念事業の募金活動等について、物心両面でのご支援ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、同窓会としての記念事業概要は下記のとおりです。

1. 記念事業全体的スケジュール

同窓会創立45周年	平成19年・・・記念事業計画案承認
	平成20年・・・募金開始
	平成22年・・・募金終了(場合によれば1年延長)
	平成23年・・・建築開始
50周年	平成24年・・・竣工、記念式典

2. 記念事業計画概要

50周年記念事業は、次の4事業とする。

- 1) 「東京農工大学同窓会50年史」の刊行
- 2) 「同窓会記念ホール」(小金井)建築および「東京農工大学50周年記念ホール」増改修
- 3) 「同窓会50周年記念学生援助」
- 4) 「記念式典」

募金目標額および事業費予定額

同窓会50年史刊行	3,200万円	編集費200万円を含む
同窓会記念ホール小金井(150㎡)	5,000万円	設備費300万円を含む
50周年記念ホール等増改修(100㎡)*	3,900万円	同窓会収納室増、玄関、音響等
50周年記念学生援助費(例えば学会発表及びサークル活動等の充実)	2,500万円	学生援助
その他(募金経費、事務経費、記念式典経費を含む)	400万円	見込み額
募金目標額	15,000万円	

* 武蔵野荘改修700万円を含む
募金が目標額に達しない場合は、武蔵野荘の改修を断念し、さらに下回る場合は、学生援助を圧縮する

同窓会会員名簿の発行について

平成17年に「個人情報保護法」が全面施行され、その直後に平成17年版同窓会会員名簿が発行された。名簿の発行後、会員宛に迷惑電話が頻繁にかかるようになり、苦情のあった会員からは非掲載の要望が相次いでいるため、この対応に苦慮している。

このようなことから、全国の国立大学の41同窓会(回答26同窓会)からアンケートをとった結果、約6割の同窓会が名簿の発行を「中止・延期を検討中」であった。

このような状況を踏まえ、本同窓会としても次回の発行(平成21年)までに、①従来どおり発行する、②延期する、③中止するについて検討させていただき、いずれかの結論を出したい。

なお、このことにより会員の皆様にご迷惑がかからないように、代替サービスは従来どおり行います。

平成18年度 同窓会学生援助事業報告

1 学会発表 (207件)

農学部・農学府・連合農学研究科 (前期): 27件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	中川 美緒	生物生産	4年	アブラナ科種間キメラに由来するCMS系統のミトコンドリアゲノム解析	日本育種学会
2	小林 哲郎	獣医学科	6年	イヌの末梢血単核球に対するシクロスポリンの影響	日本獣内科学アカデミー
3	近野 仁美	獣医学科	6年	犬天疱瘡における抗デスマグレイン1血中自己抗体の存在に関する検討	日本獣医学会
4	中里 亜由美	獣医学科	6年	シクロスポリンAを投与したアレルギー性皮膚炎の猫の11例	日本獣内科学アカデミー
5	森川 要	生物生産	M1	分取用電気泳動を利用したイネ種子中のプロテインキナーゼの精製	日本育種学会
6	山本 弘幸	生物生産	M1	低温ストレスによって誘導されるダイズ葉中のDNA	日本育種学会
7	脇尾 麻里子	生物生産	M1	イチゴにおける頂花房および腋花房の出蕾に関する遺伝特性	園芸学会
8	伊藤 博和	生物生産	M2	植物細胞中におけるリン酸化タンパク質検出法および精製法の検討	日本育種学会
9	鈴木 麻衣子	生物生産	M2	キンギョソウの老化花卉におけるプログラム細胞死の特徴	園芸学会
10	松村 洋一	生物生産	M2	リサイクル木炭緑化資材の理化学および植生生育・温度環境特性	日本土壌肥料学会
11	湯本 勇	生物制御	M1	C-13標識イソプレノイド化合物の酵素的合成	日本農芸化学会
12	長谷川 明子	生物制御	M2	2-デオキシ-7-オキサラクトン型ブラシノステロイドの生合成起源の探索	日本農芸化学会
13	坂内 敬	応用生命科学	M1	タンパク質加水分解物による澱粉の糊化の制御	応用糖質科学会
14	松本 直樹	応用生命科学	M1	Thermoactinomyces vulgaris R47 シクロキストリン結合タンパク質とγ-シクロキストリン複合体の結晶構造解析	日本農芸化学会
15	三宅 真波	応用生命科学	M1	外因性ガングリオシドGM3による癌細胞増殖能・浸潤能の制御	日本動物細胞工学会
16	田村 綾子	応用生命科学	M2	Analysis of intercellular mannose salvage pathways	国際生化学・分子生物学会議
17	由木 大	応用生命科学	M2	アトピー性皮膚炎モデルNC/Ngaマウスの病態発症・進行機構に関わるタンパク質の探索	日本ヒトプロテオーム機構第4回大会
18	吉川 治孝	応用生命科学	M2	巨大RNA-タンパク質複合体(リボソーム前駆体)のプロテオミクス解析	日本ヒトプロテオーム機構第4回大会
19	泉 雅之	国際環境農学	M1	カンキツ種間キメラにおける細胞・組織間相互作用	日本育種学会
20	富本 洋平	国際環境農学	M1	ミツバにおける環境条件により誘導されたアントシアニン発現変異メカニズム	日本育種学会
21	片野 匠	国際環境農学	M2	接木によるトウガラシの草型変異および関連遺伝子の解析	国際植物増殖者会議
22	岡安 浩次	連農 生物生産	D1	アブラナ科種間キメラに由来するアントシアニン変異系統の確立	日本育種学会
23	サルハディ ワキル アハマド	連農 生物生産	D1	Characterization of Afganistan aromatic rice specific nature	日本育種学会
24	タタン ソビアン	連農 生物生産	D1	Hormonal Morphogenesis of Mulberry Tree Mutants	国際植物増殖者会議
25	正木 俊平	連農 生物生産	D3	イネ種子の発芽初期において変動するSSDNA結合タンパク質に対する低温処理の影響	日本育種学会
26	青木 友	連農 生物生産	D3	メロンがんしゅ病菌CB-1-1株の自己胞子発芽抑制物質(ポスター発表)	日本放線菌学会
27	中村 紀夫	連農 生物学	D3	Structural Analysis and Characterization of Clostridium Botulinum type C subcomponents	国際生化学・分子生物学会議

(後期): 77件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	浅沼 俊輔	生物生産	4年	水稲の水の通導抵抗に関わる形質の遺伝子座の推定	日本作物学会
2	篠崎 良仁	生物生産	4年	アサガオにおいて系統間差異を示す花卉老化の生理・生化学的解析	日本育種学会
3	滝口 卓也	生物生産	4年	Bt毒素Cry1Acに対するカイコの抵抗性	日本蚕糸学会
4	中村 嘉孝	生物生産	4年	紫キャベツの煮汁をpH指示薬として用いた土壌呼吸測定の実験	日本土壌肥料学会
5	安田 健一	生物生産	4年	飼料用水稲長稈新品種・系統のバイオマス生産特性および倒伏抵抗性に関する性質	日本作物学会
6	吉川 美穂	生物生産	4年	土壌の吸着機能理解に向けた教材開発	日本土壌肥料学会
7	小幡 史明	応用生物科学	4年	Bacillus thuringiensis Cry1Aa ドメインIIにおけるシステイン置換体を用いた受容体結合部位の解析	昆虫病理研究会シンポジウム
8	青木 長朗	地域生態システム	4年	バス乗車姿勢の違いが急停車時における危険感に及ぼす影響	人類動態学会
9	石坂 晃美	地域生態システム	4年	野外網室内で集団飼育したマツノマガラカミキリの日中行動の連続観察	日本林学会
10	竹村 美紗子	地域生態システム	4年	ブナ科種子の貯蔵方法及び発芽率	日本林学会
11	田ノ上 真司	地域生態システム	4年	地表火を被災したスギ若齢木の回復	日本林学会
12	山内 聖史	地域生態システム	4年	落雷被害木の樹幹内部の調査	日本林学会
13	小口 孝裕	地域生態システム	4年	ヒノキ細根の呼吸における日変化・季節変化	日本森林学会
14	笠原 綾	地域生態システム	4年	平地林における落葉採取が土壌の化学性に与える影響	日本森林学会
15	雨貝 陽介	獣医	5年	イヌ肥満細胞腫の腫瘍性増殖におけるPI3Kシグナル伝達系の役割	日本獣医学会
16	二戸 奈央子	生物生産科学	M1	水稲の光合成速度に関与する遺伝子座の推定とその光合成に果たす役割の検討	日本作物学会
17	吉岡 真澄	生物生産科学	M1	陸稲の登熟期の葉の老化過程における光合成速度と光合成過程の推移	日本作物学会
18	渡邊 志保	生物生産科学	M1	水稲のたわみ型倒伏抵抗性に関与する稈の曲げ剛性関連形質のQTL解析	日本作物学会
19	亀有 直子	生物生産科学	M2	着果の有無がブルーベリー-の光合成および新梢の生長に及ぼす影響	園芸学会
20	毛利 聡子	生物生産科学	M2	air-layeringで発生した不定根に施与したCaのトマト植物体内における動態	園芸学会
21	吉田 宰	生物生産科学	M2	サイトカニン散布が水稲葉身の光合成速度に及ぼす影響とその要因	日本植物生理学会
22	三浦 乃莉子	共生持続社会学	M1	飼育下メダカに対する採食および飼育環境エンリッチメントの評価	日本動物心理学会
23	山崎 彩夏	共生持続社会学	M2	多摩動物公園のオランウータンにおける新規飼育環境導入後の一年間	日本動物心理学会
24	野口 紗代	応用生命科学	M2	Effects of LAB on IFN-γ, IL-4 and IL-10 production in murine splenocyte culture	日本免疫学会
25	山本 愛	応用生命科学	M2	Studies on the ubiquitination of intracellular proteins during the induction of T cell anergy	日本免疫学会
26	宇久田 理恵	生物制御科学	M1	宮崎県においてチャノコカクモンハマキより分離されたバキュロウイルスの性状解析	日本応用動物昆虫学会
27	勝又 卓己	生物制御科学	M1	アラビドプシスCYP85A2は、2-デオキシ-7-オキサラクトン型ブラシノステロイド合成活性を持つ	植物化学調節学会
28	鈴木 岳	生物制御科学	M1	何故BT剤はイチゴ畑で発生しているハスモンヨトウに対して効果が低いのか?	日本応用動物昆虫学会
29	戸金 悠	生物制御科学	M1	網膜からの神経結合の断たれたショウジョウバエ神経細胞死の遺伝学的解析	日本発生生物学学会
30	富澤 悟	生物制御科学	M1	塩性植物アイスプラントのタンパク質脱リン酸化酵素遺伝子の機能解析	日本植物生理学会
31	大飼 佳代	生物制御科学	M2	高濃度核多角体病ウイルス接種によって引き起こされる宿主の早期致死について	日本応用動物昆虫学会
32	納富 美穂	生物制御科学	M2	ヒメツリガネゴケのent-カウレン合成酵素のクローニングと機能解析	植物化学調節学会

33	樋口 悠	生物制御科学	M2	ハスモンヨトウ核多角体病ウイルス(SpItNPV)の宿主範囲決定機構	日本応用動物昆虫学会
34	藤本 晶	生物制御科学	M2	寄生蜂に殺虫活性をもつ昆虫ウイルス由来タンパク質の特性	日本応用動物昆虫学会
35	湯本 勇	生物制御科学	M2	完成C-13標識プレニルニリン酸の酵素的合成	植物化学調節学会
36	吉富 晶子	物質循環環境科学	M1	緑肥植物Crotalaria junceaにおけるカドミウム蓄積の特徴解析	日本農芸化学会
37	坂本 卓也	物質循環環境科学	M2	ヘアリーベッチのカドミウム蓄積および耐性へ与えるCaの影響	日本農芸化学会
38	瀬川 沙記	物質循環環境科学	M1	柱状堆積物で見える東南アジアの重金属類・微量元素汚染史	環境化学討論会
39	岩田 直人	自然環境保全学	M2	多摩川河川敷における表層堆積物粒径と出現する植物の種子特性の関係	植生学会
40	片岡 史子	自然環境保全学	M1	丹沢堂平地区のシカによる林床植生衰退地における降雨量と土壌侵食量	日本林学会
41	長谷川 奈美	自然環境保全学	M1	高分解能衛星データを用いた植生タイプ判別の検討-佐倉市の里山地域を例として-	植生学会
42	山崎 智彦	自然環境保全学	M1	東京23区北西部地域の広域避難場所における樹林の防火力診断	植生学会
43	石井 真樹子	自然環境保全学	M1	地元住民との関係から見たIターン者の山村社会への適応-長野県大鹿村を事例として-	林業経済学会
44	尾辻 佐人志	自然環境保全	M1	残材集積塊内部の位置の違いによる含水率の経時変化の差異	日本森林学会
45	佐々木 龍一	自然環境保全	M1	ヤシャブシ及びハンノキ根粒の形態特性と窒素固定能	日本森林学会
46	大場 健太郎	自然環境保全学	M2	都市近郊二次林における20年間の植生変化	生態学会
47	海堀 理佳	自然環境保全学	M2	マツノザイセンチュウの根系からの伝播の可能性	日本林学会
48	小坂井 千夏	自然環境保全学	M2	The relationship between bears behavior and activity sensor value	国際クマ会議
49	谷川 敦子	自然環境保全学	M2	戦場ヶ原の土砂堆積地に成立するズミ林の年輪解析からみた発達過程	生態学会
50	富田 哲	自然環境保全学	M2	無傷または有傷のマツ切り枝に対するマツノザイセンチュウの接種実験	日本林学会
51	奈良 遙	自然環境保全学	M2	日光戦場ヶ原湿原の約25年間の植生変化	生態学会
52	蛭木 景子	自然環境保全学	M2	学校施設における地域材利用のあり方に関する研究-地域材導入過程による比較-	林業経済学会
53	早瀬 悟史	自然環境保全学	M2	林業関係第三セクターの現状と「団地法人化」の可能性-徳島県旧木屋平村を事例として-	林業経済学会
54	山崎 陽介	自然環境保全学	M2	「信越トレイル」整備をめぐる合意形成の成立過程とその課題	林業経済学会
55	山下 真里	自然環境保全学	M2	住民の生活における狩猟採取の位置づけ-中国・内モンゴル自治区ホルチン沙地を事例として-	林業経済学会
56	若原 妙子	自然環境保全学	M1	丹沢堂平地区のシカによる林床植生衰退地における土壌pH値の変化	日本森林学会
57	鈴木 彰彰	国際環境農学	M2	P形フーリエ記述子によるイネの草型解析・I・幼苗の評価	日本育種学会
58	きんれいぬえ	国際環境農学	M2	ミャンマーのVignaにおける種子タンパク質の解析	日本育種学会
59	テイ・テイ・マー	国際環境農学	M2	アズキ(Vigna angularis)とそのF1雑種における形態的特徴と種子タンパク質の特徴	日本育種学会
60	Nuri Yusmarlita	国際環境農学	M2	Characterization of a nucleopolyhedrovirus isolated from spodoptera litura in Indonesia	日本応用動物昆虫学会
61	みあんていふおんにい	国際環境農学	M2	ベトナムと周辺地域における香り米の多様性	日本育種学会
62	余 小林	国際環境農学	M2	Mitochondrial gene constitution and development of a molecular markers specific to the cytoplasmic male sterility in tuber mustard	日本育種学会
63	金子 真	連農 生物生産学	D1	管理の異なる2つの放牧草地表層土壌における異なる深さの各リン画分の全リンに占める割合の違い	日本草地学会
64	高橋 真秀	連農 生物生産学	D1	リンゴコカモンハマキ核多角体病ウイルスオランダ株のin vivo クローニングと得られたクローンの性状解析	日本応用動物昆虫学会
65	Darioush Alidoust Sakhariz	連農 生物生産学	D2	二三の植物根圏土壌の細分画試料中の有機酸組成の比較	日本土壌肥科学会
66	服部 支	連農 生物生産学	D2	アブラナ科属間細胞融合個体及び種間キメラ由来オクラ型CMS個体における葉緑体ゲノム構造解析	日本育種学会
67	野田 知子	連農 生物生産学	D3	農業体験の「食育」に及ぼす効果に関する研究	日本農業経済学会
68	星野 真西	連農 生物生産学	D3	チャハマキmale-killing系統におけるオス幼虫の病理組織学的観察	日本応用動物昆虫学会
69	高 俊山	連農 生物学	D1	タバコモザイクウイルス(TMV)抵抗性遺伝子産物NおよびN類似タンパク質の機能ドメインの解析	日本植物病理学会
70	田 野	連農 資源・環境学	D2	カルスト地域の森林土壌の化学性が細菌・糸状菌バイオマスに及ぼす影響	日本森林学会
71	小池 伸介	連農 資源・環境学	D2	荒川河川敷におけるミドリシジミの生息するハンノキ林の環境条件	野生生物保護学会
72	李 殷和	連農 資源・環境学	D2	韓国における地域別ナラ類分土壌の炭素および窒素無機化特性	日本森林学会
73	稲田 征治	連農 資源・環境学	D3	東京都内の道路脇粉塵中微量元素濃度モニタリング(第3報:2004年度の調査)	環境化学討論会
74	浦口 晋平	連農 資源・環境学	D3	エンバクAvena strigosaのカドミウム蓄積性品種の特徴解析	日本植物生理学会
75	根本 真理	連農 資源・環境学	D3	里山における地域スケールのβ多様性	植生学会
76	本間 秀和	連農 資源・環境学	D3	イヌブナ林とブナ林の分布の違いを規定する地理的環境要因	植生学会
77	浦川 梨恵子	連農 資源・環境学	D3	スギ・ヒノキ流域における渓流水質形成に及ぼす斜面下部土壌系の重要性	日本森林学会

②工学部・工学府(前期):30件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	金 志樹	生命工	M1	ピロロキノリンキノンによるヒト由来alphaシヌクレインの細胞毒性への影響	日中韓酵素工学会会議
2	小林 雅樹	生命工	M1	ピロロキノリンキノンによるヒト由来alphaシヌクレインの凝集・線維化への影響	日本生物学会2006年大会
3	菅野 由利	生命工	M1	超好熱性古細菌 Thermococcus sp. strain KS-1由来プレフォルディン分子シャペロン機能	蛋白質科学会
4	杉浦 博英	生命工	M1	Multiplexed SNPs genotyping by ASPE reaction using Handy Bio-Strand	20th IUBMB Int. Congress
5	種岡 篤志	生命工	M1	グルコース/ガラクトース結合蛋白質への変異導入による分子認識能力および親和性の変化	日本生物工学会2006年大会
6	金 承洙	生命工	M2	海洋酵母由来フルクトシルアミノキターゼの変異導入による酵素特性の改変	日中韓酵素工学会会議
7	千野 櫻子	生命工	M2	フルクトシルアミノ酸結合タンパク質(FABP)の変異導入によるリガンド結合部位の解析	日本生物工学会2006年大会
8	上沢 朗義	応用化学	M1	ロジウム錯体触媒を用いたアルキンの環化三量化反応によるヘリセン誘導体の合成	日本化学会第86回春青年会
9	寒河江 裕美	応用化学	M1	ロジウム錯体触媒を用いたアルキンの環化三量化反応によるポリエーテルシクロフォンの合成	日本化学会第86回春青年会
10	佐々木 創	応用化学	M1	遷移金属触媒を用いたシクロヘキサジエン共重合体の合成とその利用	第55回高分子学会年次大会
11	須田 健資	応用化学	M1	1,2-ビス(アリアルプロピオリル)ベンゼンを用いた付加環化反応によるテラリール/ビアリアルルの合成	日本化学会第86回春青年会
12	飛永 朋亮	応用化学	M1	超臨界急速膨脹法におけるイブプロフェン微粒子への相挙動の影響	分離技術会年會2006
13	中島 大輔	応用化学	M1	スチレン系重合体の側鎖修飾による耐熱性高分子の合成	第55回高分子学会年次大会
14	橋本 直司	応用化学	M1	ルイス酸を固定した層間化合物を用いたオレフィンと極性ビニルモノマーとのラジカル共重合	第55回高分子学会年次大会
15	藤井 望	応用化学	M1	対称性ジオールを導入したフマレートモノマーの合成と重合性の検討	第55回高分子学会年次大会
16	山根 庸平	応用化学	M1	食塩蒸発晶析でのさし水添加操作による微小結晶数の制御	分離技術会年會2006
17	今村 光宏	応用化学	M2	超臨界二酸化炭素からのナフタレン結晶の結晶化挙動	分離技術会年會2006
18	庄子 武明	応用化学	M2	ロジウム錯体触媒によるプロバルギルアルコール/ジオール誘導体の異性化反応	日本化学会第86回春青年会
19	西田 健一	応用化学	M2	泡沫層を用いた有機結晶粒子群の鋳型晶析とその操作条件の検討	分離技術会年會2006
20	西田 剛士	応用化学	M2	ロジウム錯体触媒を用いた連続芳香環構築によるC2対称軸不斉ビアリアルルの合成	日本化学会第86回春青年会
21	西村 直也	応用化学	M2	Ni錯体を用いたスチレン-嵩高いシクロオレフィン共重合体の合成	第55回高分子学会年次大会
22	森本 甫亨	応用化学	M2	ジアステレオマー化・ラセミ化・晶析を組み合わせたラセミ化合物の分離プロセス	分離技術会年會2006
23	山本 正道	応用化学	M2	ラクトン環を有する(メタ)アクリル酸エステル系エステルのラジカル共重合(2)	第55回高分子学会年次大会
24	和田 梓	応用化学	M2	ロジウム錯体触媒を用いたアルキンとイソチオシアナートとの[2+2+2]付加環化反応	日本化学会第86回春青年会
25	井上 裕之	機械システム	M1	予変形を受けたI鋼の除荷時および再負荷直後の変形特性	日本塑性加工学会
26	坪川 景介	機械システム	M1	真円加工用ドリル工具の開発	精密工学会
27	堀内 義雅	機械システム	M1	金属薄板の面内直交2方向に引張・圧縮混成応力を負荷する試験法の研究	H18年度塑性加工春学講演会
28	越水 成樹	機械システム	M2	アレイ型超音波センサによる充填中の樹脂内部流動測定	プラスチック成形加工学会
29	柴田 崇之	電気電子	M1	高圧水蒸気アニールによるナノ結晶ポーラスシリコンのEL安定化	第53回応用物理学関係連合講演会
30	橋本 浩一	生命工	D1	嫌気条件下における鉄型活性型Nitrile Hydrataseの反応中心構造	第6回日本蛋白質科学会年會

(後期) : 55件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	大竹 陽介	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウムBINAP系錯体触媒を用いた1,6-ジインとカルボニル化合物との [2+2+2] 付加環化反応	日本化学会
2	柴田 祐	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いたアルデヒドとN,N-ジアルキルアクリルアミドとの分子間ヒドロシ化反応	日本化学会
3	原 裕美	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いた [2+2+2] 付加環化反応によるペルフルオロアルキル芳香族化合物の合成	日本化学会
4	北條 大樹	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いたビニルアリアルアルデヒドとアルケン及びアルキンとの [4+2] 付加環化反応	日本化学会
5	堀 智子	応用分子化学	4年	ロジウム錯体触媒を用いたチオール及びジチオールとハロゲン化アルキルとのカップリング反応	日本化学会
6	加藤 波里	機械システム学	4年	分光偏光変調器を用いた複屈折・施光同時計測法	精密工学会
7	中條 充	機械システム学	4年	2重液晶位相変調によるミューラー行列ポラリメータ	応用物理学会
8	松沢 由樹	機械システム学	4年	液晶格子スキャナを用いた三次元形状計測	精密工学会
9	橋本 敬史	機械システム学	4年	微細加工における加工現象の解明	日本機械学会
10	スバヤリウイチナイ ビキヤク	電気電子工学	4年	微結晶シリコン薄膜形成における水素ラジカル処理の効果	応用物理学会
11	土屋 知大	電気電子工学	4年	SPM局所酸化法による大面積加工	応用物理学会
12	吉田 健治	電気電子工学	4年	SPM局所酸化法による10nm以下級Si酸化物細線の作製	応用物理学会
13	木村 隼人	情報コミュニケーション工学	4年	Music Part Classification Using the ICA	NCSP2007
14	阪本 紘嗣	情報コミュニケーション工学	4年	進化型領域分割による画像分類	計測自動制御学会
15	深田 陽介	情報コミュニケーション工学	4年	A Design of the Mapping Method of Color and Kansei	NCSP2007
16	村上 純子	情報コミュニケーション工学	4年	Classification of conditions by the EEG	NCSP2007
17	横松 恵理子	情報コミュニケーション工学	4年	Preference Acquisition by Using Olfactory Stimulus and EEG	NCSP2007
18	森 崇	生命工学	M1	新規歩行計測システム(GAITR)を用いた骨粗鬆症マウスの歩行解析	日本骨代謝学会
19	神前 太郎	生命工学	M2	FUNCTIONAL ANALYSIS OF GROUP II CHAPERONIN USING SUBUNIT-LINKAGE MUTANTS	Cold Spring Harbor Lab Meeting
20	吉野 竜太	生命工学	M2	エストロゲン欠乏による歯槽骨の骨量低下と歯周疾患との関連	日本骨代謝学会
21	瀧田 守親	生命工学	D3	がんの骨転移と骨破壊における膜型プロスタグランジンE合成酵素-1(mPGES-1)の関与:mPGES-1ノックアウトマウスを用いた解析	日本骨代謝学会
22	尾坂 拓也	応用化学	M1	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いた [2+2+2] 付加環化反応による光学活性フタライドの合成	日本化学会
23	須田 健資	応用化学	M2	カチオン性ロジウム錯体触媒を用いた [2+2+2] 付加環化反応による光学活性ヘリセン及び1,2-テラリールの合成	日本化学会
24	正木 俊介	応用化学	M1	ゾル・ゲル法を用いた有機-無機ハイブリッド粒子の作製	化学工学会
25	渡邊 耕太郎	応用化学	M1	フォトブリーチング法を用いた高分子光導波路デバイスの開発	化学工学会
26	西田 健一	応用化学	M2	泡沫を利用した有機結晶の鋳型晶析とその操作条件の検討	化学工学会
27	藤井 さなえ	応用化学	M2	シクロデキストリンとポリオレフィンの包接化合物の合成	高分子学会
28	伊藤 彰彦	応用化学	D2	種晶の面の違いによる優先晶析時の純度低下機構の検討	化学工学会
29	桑垣内 智仁	機械システム工学	M1	ミューラー行列による微細周期構造の光学特性の評価	応用物理学会
30	芝宮 孝	機械システム工学	M1	摩擦状態にある真実接触部の可視化(無潤滑ヘルツ接触の場合)	日本トライボロジー学会
31	富田 暁	機械システム工学	M1	実道路環境下における運転行動計測によるブレーキ支援の評価	日本機械学会
32	原 聡	機械システム工学	M1	電動モータの特徴を利用したタイヤ発力推定法の開発	日本機械学会
33	篠原 俊太郎	機械システム工学	M2	操舵を用いた自動衝突回避システムへのモデル予測制御の適用	機械学会
34	竹内 遥	機械システム工学	M2	放電加工中に発生する気泡の成分分析	電気加工学会
35	野村 幸代	機械システム工学	M2	ステアリングギヤ比と操舵トルクの変化に対するドライバ操舵挙動の解析	機械学会
36	森本 賢治	機械システム工学	D2	極間隙の流体解析と放電点探索アルゴリズムの連成による形彫り放電加工シミュレーション	電気加工学会
37	館 一平	電子情報工学	M1	Implementable Models of SMT Processor into FPGA	PDPTA2006
38	今井 悠介	電気電子工学	M1	空間像表示に用いるリニアカメラアレイにおけるカメラ輻輳の有無の比較	映像情報メディア学会
39	荻野 拓海	電気電子工学	M1	SPM局所摩擦場によるSiに対する20nm以下級スタックラッチリソグラフィ	応用物理学会
40	當嶋 祥	電気電子工学	M1	マイグレーションによるナノギャップ電極のトンネル抵抗制御	応用物理学会
41	川内 和樹	電気電子工学	M1	Effect of Temperature in a-Si:H Formation for Heterojunction Solar Cells by Remote-PECVD	Renewable Energy 2006
42	坂本 祥	電気電子工学	M1	一次元網点分解を用いた三次元プリントにおける奥行き表示範囲の評価	日本画像学会
43	西村 信也	電気電子工学	M1	動的探針制御手法によるSPM局所酸化ナノリソグラフィ	応用物理学会
44	渡辺 優一	電気電子工学	M1	写真測量法による影の定量評価システムの提案	電気学会
45	有福 直樹	電気電子工学	M2	太陽電池用シリコン基板におけるSiNx:H/a-Si:H2層薄膜のバッシベーション効果	応用物理学会
46	佐藤 成	電気電子工学	M2	水素ラジカルによる輸送効果を利用したInN薄膜の形成と評価	応用物理学会
47	菅原 雅仁	電気電子工学	M2	二次元アレイ熱誘起ナノ結晶シリコン超音波源の位相制御動作	応用物理学会
48	竹内 章	電気電子工学	M2	イオン注入法により作製したナノ結晶シリコンの発光特性	応用物理学会
49	中村 祐介	電気電子工学	M2	A new type of scaled-down network simulator for testing PV inverters	再生可能エネルギー2006
50	平田 啓二	電気電子工学	M2	二種類のフォトセンサを持つ新型日射計におけるスペクトル誤差の解析手法の開発	電気学会
51	太田 敢行	電子情報工学	D1	ナノシリコン弾道電子エミッタの大気圧動作と表面終端制御による安定化	応用物理学会
52	小笠原 嘉泰	電子情報工学	D1	Towards Reconfigurable Cache Memory for a Multithreaded Processor	PDPTA2006
53	川崎 憲広	電子情報工学	D1	太陽光発電システム出力変動の検出時間別発生確率分布を用いた変動特性定量化手法	電気学会
54	全 珉 星	電子情報工学	D1	Effect of Deposition Temperature on a-Si:H films Prepared by Remote-PECVD for Heterojunction Solar Cells	Int. Conf. on Nano Sci. & Tech.
55	李 庚 垂	電子情報工学	D2	D-UPFC as a Voltage Regulator in the Distribution System	Renewable Energy 2006

③生物システム応用科学府 (BASE) (前期) : 7件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	坂口 孝太	生物システム応用科学	M1	陽極と親和性を有する有機EL材料の合成	第55回高分子学会年次大会
2	寺本 正剛	生物システム応用科学	M1	ITO微粒子とpolymer latexの混合による複合体の作製	第55回高分子学会年次大会
3	村田 達哉	生物システム応用科学	M1	チオキサンテン単位を有する無電場駆動PR材料の合成と評価	第55回高分子学会年次大会
4	春日 英昌	生物システム応用科学	M1	正孔及び電子輸送能を有するブロック共重合体の合成と有機EL素子への応用	繊維学会
5	時枝 純司	生物システム応用科学	M1	多機能性ブロック共重合体の合成とフォトリソグラフィ材料の特性評価	繊維学会
6	沈 婕	生物システム応用科学	D1	高い蛍光性を持つポリチオフェン-graft-ポリスチレンの合成と評価	第54回高分子学会
7	藤岡 正洋	システム応用科学	D1	ポリスチレン/4-n-ブチルフェニルアミン複合微粒子の作製 均一粒径光導電性微粒子の合成	第55回高分子学会年次大会

(後期) : 10件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	鈴木 旭	生物システム応用科学	M1	カイコガ幼虫の血球によるノジュール形成の分子機構解析	昆虫病理研究会シンポジウム
2	高瀬 比菜子	生物システム応用科学	M1	カイコガ体液中で異物認識網を形成するCタイプレクチン群の探索と解析	昆虫病理研究会シンポジウム
3	森本 智夏	生物システム応用科学	M1	ファージディスプレイ法を用いたBacillus thuringiensis Cry 毒素の殺虫活性改良系の構築	昆虫病理研究会シンポジウム
4	深井 寛修	生物システム応用科学	M1	Gap Analysis of an Age by Using the Evolutionary Method	NCSP2007
5	土肥 賢太郎	生物システム応用科学	M1	Pattern Recognition of EMG Signals by the Evolutionary Algorithms	SICE-ICCAS' 2006
6	中島 宏	生物システム応用科学	M1	複合加工施盤におけるロータリ工具の加工特性	精密工学会
7	加藤 篤	生物システム応用科学	M2	複合加工施盤における難削材の駆動形ロータリ切削	日本機械学会

8	弓座 大輔	生物システム応用科学	M2	同時2軸制御による円筒面の仕上げ加工精度	日本機械学会
9	伊藤 伸一	生物システム応用科学	D1	音楽聴取時における脳波の特徴抽出と評価方法	日本シミュレーション&ゲーミング学会
10	松田 礼	生物システム応用科学	D3	パッチ分割切削法における曲面への工具経路生成と規則的表面模様形成	精密工学会

④技術経営研究科 (MOT) (後期): 1件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	小田桐 久	技術リスクマネジメント	M2	茶カテキンの骨代謝調節作用	日本食品科学工学会

2 優秀卒業論文 (6件)

	氏名	学科名	学年	卒論題目
1	劍持 佑介	獣医	6年	フルメキンによるマウス肝発がんプロモーションにおける酸化的ストレスの関与
2	横内 友祐	獣医	6年	β naphthoflavoneのラットにおける発がんプロモーション機序の解析
3	山内 聖史	地域生態システム	4年	樹木の落雷内部痕跡・落雷外部痕跡に関する研究
4	土屋 直	化学システム工	4年	経口DDS用ナノカプセル/模擬粘膜間相互作用の評価と制御
5	大根田 章絵	生物生産学	4年	イチゴ果実の部位別硬度の遺伝特性
6	中川 美緒	生物生産学	4年	アブラナ科種間キメラおよび属間細胞融合由来の細胞質雄性不稔系統におけるミトコンドリアゲノム解析

3 コンテスト・コンクール等出場、入賞 (10件)

	氏名	学科名	学年	コンクール・コンテスト名	入賞等
1	喜多 智	農農 資源・環境	D3	第53回日本生態学会大会・(東カリマントン熱帯林土壌系のバイオマスと窒素・リンの関係)	ポスター賞「物質循環」分野において優秀賞
2	航空研究会			「鳥人間コンテスト」	出場
3	伊藤 彰彦	応用化学	D2	分離技術会年会・(優先品析法における純度低下機構の検討)	分離技術会年会学生賞
4	岡村 清志	生物システム応用科学	M2	マザック財団論文顕彰・(Machining Characteristics of Low-frequency Vibration Drilling)	優秀論文
5	米谷 法子	地域生態システム	4年	オリエンテーリング 「ナショナルチャレンジ矢板大会兼ユニバーシアード世界選手権代表選考会」	準優勝
6	ロボット研究会RUR			NHKロボットコンテスト	優勝
7	黒川研 A(川崎 憲広)	電子情報工学	D2	環境日本一エコエネルギーコンテスト (ソーラーカー部門)	デザイン賞
8	中島 宏	生物システム応用科学	M1	精密工学会 第13回学生会員卒業研究発表講演会	優秀講演賞
9	唐 干 龍	生物システム応用科学	D1	International Conference on Progress of Machining Technology2006	ベストプレゼンテーション賞 ベスト論文賞
10	松田 礼	生物システム応用科学	D3	International Conference on Progress of Machining Technology2006	ベストプレゼンテーション賞 ベスト論文賞

4 課外活動 (20件)

ロボット研究会/演劇部/管弦楽団/グリークラブ/竹桐会/落語研究会/バラ会/分子生物学ゼミ(自主ゼミ)/森づくりの会(自主ゼミ)/ワンダーフォーゲル部/ハンドボール部/空手道部/テコンドー部/ハングラライダー部(Flying Chicken)/馬術部/少林寺拳法部/自転車部/合気道部/オリエンテーリング部/航空研究会

5 学園祭 (2件)

農学部/工学部(学園祭実行委員会)

6 キャリアアドバイザー支援 (2件)

学生の皆さんが、進路や就職について個別に指導・助言を受けられるように、豊富な経験と知識を有する相談員(キャリアアドバイザー)2名を同窓会として支援しております。

同窓会役員等
体制

会 長 畑中 孝晴 (農S31) (平成19・20年度)

副会長 (平成19・20年度)

藤巻 宏 (農 S36) 西出 照雄 (製糸S41)
 草野 洋一 (養蚕S47) 壁矢 久良 (織工S35)
 安藤 哲 (植防S47) 町山 紀郎 (工化S39)
 久米 賢次 (農化S47) 遠藤 幸一 (工化S46)
 佐渡 篤 (林産S38) 新仏 利伸 (機械S46)
 星野 義延 (環保S53) 宇野 亨 (電気S55)
 松井 英輔 (林 S38) 大野 直次 (応物S47)
 田内 堯 (農工S35) 岩澤 京子 (数情S56)
 本間 秀和 (地生H12) 渡邊 俊夫 (獣医S49)
 宮本 譲 (獣畜S22)

常務理事 (平成18・19年度)

理 事 長 生原喜久雄 (林 S41)
 副理事長 亀山 秀雄 (化工S48)
 総務部長 高橋 幸資 (農化S45)
 副部長 渡辺 元 (獣医S54) 会務担当
 副部長 渡邊 敏行 (材シスS61) 支部担当
 副部長 大谷 幸利 (機シスS61) 総会担当

経 理 部 長 堀 三計 (機械S52)

副 部 長 多羅尾光徳 (環保H3)
 事業部長 淵野雄二郎 (農 S43)
 副 部 長 岡山 隆之 (林産S49) 企画担当
 副 部 長 久保 隆文 (林産S43) 分収林担当
 名簿担当部長 寺岡 徹 (植防S50)
 副 部 長 並木美太郎 (数情S59)
 広 報 部 長 桑原 利彦 (生機S57)
 副 部 長 滝山 博志 (化工S62) HP担当
 副 部 長 佐藤 敬一 (林産S56) HP担当
 副 部 長 大川泰一郎 (農 S62) 会報担当
 副 部 長 夏 恒 (機シス博H7) 会報担当

監 事 (平成18・19年度)

伏谷 賢美 (林 S36)
 箱田 直紀 (農 S37)
 澤田 孚夫 (機械S40)

事務局 長 山田 昭一

繊維・有機材料部会

日 時 平成18年11月11日
 開催場所 工学部6号館L0631講義室
 参加者数 50名
 議事内容 平成18・19年度事業計画
 及び予算案
 講演・討論等 「F1用タイヤ開発の意義」
 講師 浜島裕英氏(織高S50卒)

**応用物理学部会**

日 時 平成18年11月18日
 開催場所 工学部4号館L0411教室
 参加者数 40名
 議事内容 会長挨拶・会計報告・
 役員改選・学科現況
 の報告
 講演・討論等 田久保嘉隆教授より学
 科の近況報告

**新潟県支部**

日 時 平成18年6月2日
 開催場所 新潟市 クオリスビル
 参加者数 26名
 議事内容 役員改選・会計報告
 ・本部総会報告

**宮城県支部**

日 時 平成18年7月8日
 開催場所 KKRホテル仙台
 派遣理事名 久保 事業副部長
 参加者数 24名
 議事内容 平成17年度収入支出決算
 平成18年度収入支出予算
 講演・討論等 「大学の近況」
 「大学における教育研究の
 グローバル化」

**福島県支部**

日 時 平成18年7月8日
 開催場所 福島グリーンパレス
 派遣理事名 生原 理事長
 参加者数 35名
 議事内容 決算報告・事業計画
 会則の改正(役員の任期)
 講演・討論等 「大学の近況」

**山口県支部**

日 時 平成18年7月9日
 開催場所 新山口ターミナルホテル
 派遣理事名 寺岡 名簿担当部長
 参加者数 11名
 議事内容 第43回通常総会・理事会の報告
 役員改選
 講演・討論等 「大学の近況」
 「世界のどこでイネが栽培されて
 いるか」
 「イネいもち病菌の特性」

**神奈川県支部**

日 時 平成18年9月2日
 開催場所 かながわ労働プラザ9F
 派遣理事名 大谷 総務副部長
 参加者数 29名
 議事内容 平成17年度決算
 及び監査報告
 平成18年度予算
 講演・討論等 「大学の近況」
 情報交換

**徳島県支部**

日 時 平成18年10月28日
 開催場所 徳島市「笹乃庄」
 参加者数 8名
 議事内容 収支報告
 講演・討論等 情報交換・懇親

**三重県支部**

日 時 平成18年9月10日
 開催場所 津市「新玉亭」
 派遣理事名 堀 経理部長
 参加者数 11名
 議事内容 役員改選
 講演・討論等 「大学の近況」



千葉県支部

日時 平成18年11月24日
 開催場所 千葉市「ぱるるプラザ千葉」
 派遣理事名 桑原 広報部長
 参加者数 64名
 議事内容 平成16・17年度事業活動・会計報告
 平成18・19年度事業活動方針・予算(案)
 役員について
 講演・討論等 「大学の近況」
 叙勲紹介・懇親



秋田県支部

日時 平成18年11月25日
 開催場所 秋田市 協働大町ビル
 派遣理事名 渡辺(敏) 総務副部長
 参加者数 15名
 講演・討論等 「機能性高分子ゲルの開発と応用」
 「大学の近況」



愛媛県支部

日時 平成19年2月17日
 開催場所 えひめ共済会館
 派遣理事名 多羅尾 経理副部長
 参加者数 23名
 議事内容 支部運営報告
 本部同窓会総会参加報告
 会計・監査報告
 役員改選
 講演・討論等 「微生物分解について」
 「大学の近況」



富山県支部

日時 平成19年3月10日
 開催場所 庄川温泉ゆめつづり
 参加者数 12名
 議事内容 平成18年度会計報告
 本部総会概要



大分県支部

日時 平成18年10月28日
 開催場所 大分市「割烹さとう」
 派遣理事名 大谷 総務副部長
 参加者数 21名
 議事内容 平成17年度事業・会計報告
 平成18年度事業計画(案)
 役員改選
 講演・討論等 「東京農工大学の今と学生の活躍～ロボコン大会など」



青森県支部

日時 平成18年11月25日
 開催場所 ラ・プラス青い森
 参加者数 16名
 議事内容 前支部長へ感謝状の贈呈
 同窓会50周年記念事業に
 対する募金の協力について
 活動費について
 講演・討論等 懇親



広島県支部

日時 平成18年12月10日
 開催場所 鯉城会館
 参加者数 18名
 議事内容 会計報告
 役員承認
 同窓会総会の報告
 近況報告
 講演・討論等



静岡県支部

日時 平成19年3月4日
 開催場所 クーポール会館
 派遣理事名 竹山先生
 参加者数 54名
 議事内容 平成18年度活動報告
 ・収支決算
 平成19年度活動計画
 「富士山世界遺産登録へのロードマップ」
 渡辺豊博(農工S48卒)
 講演・討論等



埼玉県林学関係

日時 平成18年6月10日
 開催場所 川越市「甘太郎」
 参加者数 14名



S40農芸化学科

日時 平成17年10月21日
 開催場所 南房総 パール南房パラダイス
 支部・クラス S40農芸化学科卒
 参加者数 16名
 実施事項 情報交換・親睦

**フサク会**

日時 平成18年4月16～17日
 開催場所 いわき市 ホテルハワイアンズ
 支部・クラス S39工業化学科卒
 参加者数 19名
 実施事項 親睦・観桜・ゴルフ

**S23蚕糸科**

日時 平成18年5月12日
 開催場所 石和温泉 ホテル八田
 支部・クラス S23蚕糸科
 参加者数 7名
 実施事項 情報交換

**ポプラ会**

日時 平成18年5月17～18日
 開催場所 秋葉原 ワシントンホテル
 支部・クラス S30獣医学科
 参加者数 24名
 実施事項 情報交換・懇親

**かいこ会**

日時 平成18年5月18～19日
 開催場所 湯河原温泉 ホテル観山
 支部・クラス S19年9月養蚕・栽桑・製糸学科卒
 参加者数 9名(同伴3名)
 実施事項 親睦・合唱

**S37農学科**

日時 平成18年6月2日
 開催場所 渥美半島 伊良湖岬
 支部・クラス S37農学科卒
 参加者数 16名
 実施事項 親睦

**S31農学科・農芸化学科合同**

日時 平成18年9月9日
 開催場所 銀座 クラブ「凧」
 支部・クラス S31農学科・農芸化学科卒
 参加者数 農学科8名、農芸化学科9名
 実施事項 近況交換・親睦

**みそよ会**

日時 平成18年9月25～27日
 開催場所 韓国 ソウル
 支部・クラス S34獣医学科卒
 参加者数 9名(同伴5名)
 実施事項 古希祝

**糸交会**

日時 平成18年10月1日
 開催場所 箱根湯本 ホテル河鹿荘
 支部・クラス S31製糸学科卒
 参加者数 9名
 実施事項 卒業50周年の集い

**武蔵野38人会**

日時 平成18年10月12～13日
 開催場所 鬼怒川温泉
 支部・クラス S26製糸学科卒
 参加者数 17名(同伴2名)
 実施事項 親睦



38F

日 時 平成18年10月19～20日
 開催場所 浜松町 アジュール竹芝
 支部・クラス S38林学科卒
 参加者数 19名
 実施事項 野々村名誉教授を囲んで情報交換・親睦

**S29蚕糸別科**

日 時 平成18年10月20～21日
 開催場所 那須 マウントホテル
 支部・クラス S29蚕糸別科卒
 参加者数 11名
 実施事項 近況交換・親睦

**多摩留会**

日 時 平成18年10月21日
 開催場所 農学部・ホテルコンチネンタル府中
 支部・クラス S31獣医学科卒
 参加者数 13名
 実施事項 卒業50周年記念
 ・近況交換・親睦

**繊維23卒**

日 時 平成18年10月30日
 開催場所 KKRホテル東京
 支部・クラス S23繊維農業科卒
 参加者数 11名
 実施事項 近況交換

**機械81会**

日 時 平成18年11月11日
 開催場所 熱海温泉 熱海後楽園ホテル
 支部・クラス S56機械工学科卒
 参加者数 14名
 実施事項 近況確認・親睦

**S23蚕業実科**

日 時 平成18年11月12～14日
 開催場所 別府温泉
 支部・クラス S23蚕業実科卒
 参加者数 6名(夫婦同伴)
 実施事項 情報交換・親睦

**S22農学甲**

日 時 平成19年4月11日
 開催場所 KKRホテル東京
 支部・クラス S22農学科甲卒
 参加者数 11名
 実施事項 卒業60年の集い

**五季会**

日 時 平成19年4月19日
 開催場所 東京上野公園
 韻松亭
 支部・クラス S32農芸化学科卒
 参加者数 20名
 実施事項 卒業50周年記念・
 親睦

**S31繊維工学科**

日 時 平成19年5月7日
 開催場所 日本橋 うすげぼー
 支部・クラス S31繊維工学科卒
 参加者数 7名
 実施事項 親睦

**ポプラ会**

日 時 平成19年5月15～16日
 開催場所 千葉 鴨川グランドホテル
 支部・クラス S30獣医学科卒
 参加者数 14名(同伴9名)
 実施事項 情報交換・懇親

**織工38会**

日 時 平成19年5月21～22日
 開催場所 熱海 伊藤忠伊豆山荘
 支部・クラス S38繊維工学科卒
 参加者数 16名
 実施事項 情報交換
 ・親睦・絵画鑑賞



掲 Kei 示 Ji 板 Ban

このたびの新潟県中越沖地震による被災者の皆様には心よりお見舞い申し上げます。

米山勝美（植防S41卒）氏が 日本農学賞を受賞

本学卒業生米山勝美氏（現在明治大学農学部教授、農学部長）が平成19年度日本農学賞および第44回読売農学賞を受賞されました。日本農学賞は農学関係の学会の推薦を基に日本農学会が選考を行うもので、日本の農学研究者間における最高の栄誉とされており、米山氏は日本農薬学会の推薦により受賞されました。また、読売農学賞は日本農学賞の受賞者に対し、読売新聞社から授与されるものです。両賞の授賞式は平成19年4月5日に執り行われました。

今回、理化学研究所から明治大学での研究成果である「植物病原菌の病原因子の解明と病害抵抗性植物の創成に関する先駆的研究」のタイトルで受賞されました。

受賞講演において、米山氏は、これまでの研究業績を紹介されるとともに、農学研究者が直面している、食の安全・安心に関する、研究者と消費者の理解のギャップについて述べられ、今後の農学教育のあり方についても議論をされました。卒業生がこのような活躍をされ、農学の将来について熱く語られたことは本学にとって大変名誉なことです。また、米山氏と本学では現在も芝草病害等に関する感染病理学の研究を通じて活発な研究交流が行われております。

今後の米山氏の研究のご発展を期待しております。

〔宮脇 昭 氏〕 特別講演会開催される

さる平成18年10月20日（金）、「2006年ブループラネット賞」を受賞された宮脇氏を迎えて特別講演会が開催されました。また、同窓会では受賞をお祝いしてささやかな御祝を贈呈いたしました。

宮脇氏は、このたびの栄えある受賞を機会にさらにエコロジーの脚本にしたがって足元からすべての皆さんと共にいのちと心と遺伝子を守る土地本来の森を日本からアジア、世界に広げたいと決意を新たにしておられました。

寺岡徹（植防S50卒）教授が日本 植物病理学会で学会賞、 有江力准教授らが論文賞を受賞

本学大学院共生科学技術研究部生命農学部部門（生物制御科学専攻/応用生物科学科）の寺岡徹教授が、「植物病理学上世界に冠たる研究成果を挙げるとともに、我が国の植物病理学の発展に著しい貢献をされた」と認められ、我が国が誇れる植物病理学研究者として、平成19年度日本植物病理学会大会において学会賞を受賞し、3月29日（木）に授賞式が行われました。

「イネ・いもち病菌の相互認識機構に関する研究」が、いもち病防除剤開発や抵抗性育種に繋がる基礎研究として非常に重要であると評価され、今回の学会賞授与が決定したものです。

今後も、安全・安心な食糧生産のために世界的な研究を進められることが期待されています。

このほかにも、筆頭著者を高橋英樹氏として、本学の有江 力准教授および大学院農学府修士課程に在籍していたSyofi Rosmarawati、福島すみれ、菊地麻里の各氏で共同執筆した、「Takahashi H. et al. (2005) Catalog of Micro-Tom tomato responses to common fungal, bacterial, and viral pathogens.」が、J. Gen. Plant Pathol. 71:8-22（日本植物病理学会発行の国際誌）に掲載されて以降、数多く引用され、我が国の植物病理学のレベルの向上、高いレベルの喧伝、当該雑誌の国際化に寄与したとして、同学会大会で論文賞を受賞しました。

慶弔

慶 事 お祝い申し上げます

平成18年春の叙勲

山口 厚 (農土S26) 瑞宝双光章

鈴木慎二郎 (農S34) 瑞宝中綬章

平成18年秋の叙勲

原口 隆英 (名誉教授) 瑞宝中綬章

相坂 登 (織工S33) 瑞宝中綬章

玉木 佳男 (農化S33) 瑞宝中綬章

原 喜一郎 (林S34) 瑞宝中綬章

島田 俊弘 (養蚕S33) 瑞宝小綬章

関 登世彦 (農化S28) 瑞宝双光章

平成19年春の叙勲

塚本 良則 (名誉教授) 瑞宝中綬章

衣山 陽三 (農化S36) 瑞宝小綬章

阪田 剛一 (農工S33) 瑞宝小綬章

守吉 佑介 (織化S38) 瑞宝小綬章

横山 隆一 (獣医S46) 黄綬褒章

2007年統一地方選挙

中村 弘 (農工S53) 青森県議会議員

小林東一郎 (植防S56) 長野県議会議員

弔 事 ご冥福をお祈り申し上げます

川口 正英 (農実S14) 元神奈川農支部長

渡部 直吉 (農学S20) 名誉教授

佐藤 巖 (獣畜S24) 元秋田農支部長

穴瀬 眞 名誉教授

森田 琢磨 名誉教授

農工大ブランド焼酎「賞典禄」のお披露目を開催

平成19年3月24日(土)、50周年記念ホールにおいて、本学F Sセンターで栽培した米・芋を原料として製造した焼酎「賞典禄(しょうてんろく)」のお披露目を開催しました。

原料の米の品種は稗(かん・稲の幹)が丈夫で、かつ、高い病気抵抗性を有する「月の光」を使用し、さつまいもの品種はアントシアニン色素を含み鮮やかな紫色をした「パープルスweetロード」を使用しており、出席された名誉教授等の先生方には、その柔らかな香りと芳醇な味わいが大変好評でした。

また、お披露目会では米・いもそれぞれの焼酎が入ったカメが披露され出席者の注目を集めました。

なお、麦焼酎については今秋には製造される予定です。



原 料	「月の光」、芋「パープルスweetロード」 ※ 麦は未定(発売は秋ごろの予定)
商品名	「賞典禄」農工大の米・麦・芋で作った焼酎 720ml (化粧箱付き) 2,000円 300ml 2本詰(米・芋) 1,500円

※「賞典禄」とは、本学農学部キャンパスにある「大久保利通公碑」にちなんだ言葉で、大久保公が維新の功により賞与として賜った禄「賞典禄」2年間分を勸農局に献納して奨学の資にあてたことに由来しています。

このネーミングは学生・教職員・卒業生からの応募により選ばれました。

※ご購入を希望される方は下記にお問い合わせ下さい

農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター事務局

電話 042-367-5812

事務局だより

JIMUKYOKU-DAYORI

「住所・勤務先等の変更届のお願い」

住所、勤務先等の変更があった場合には、すみやかに変更連絡票はがき、電話、メールなどで事務局までご連絡いただきたくお願い申し上げます。

事務局では転居され、郵便物が返送された会員の方に現住所等の問い合わせをしております。

同窓会ホームページのご案内 <http://tuat-dousoukai.jpn.org/>

昨年度よりリニューアルしました同窓会HPでは内容を随時更新し、農工通信に先駆けて最新情報を掲載していますので是非ご利用下さい。

また、部会・支部、クラス会便りも電子媒体でお送りいただければ、随時掲載いたしますので、当日参加できなかった方もHPでご覧いただくことが出来ます。どうぞ下記アドレスまでお送り下さい。お待ちしております。

E-mail: info@tuat-dousoukai.jpn.org

〔慶弔についてのご連絡〕

同窓会正会員の慶事および弔事の際には、会員の方々からのご連絡に基づき、同窓会から祝電あるいは弔電をお送りしております。

このような慶弔事のご連絡の際に、次のような事項についてあわせてご連絡ください。

1. 慶事（褒賞、叙勲等）の場合

- ・受章者、受賞者の氏名、年齢、卒業年次、学科、住所、電話等
- ・受章、受賞の種類（褒賞、叙勲その他の賞の種類）
- ・受章、受賞の日時

2. 慶事（選挙の当選等）

- ・当選者氏名
- ・選挙の種類
- ・就任年月日

3. 弔事の場合

- ・逝去者の氏名、年齢、卒業年次、学科、住所、電話等
- ・ご遺族（喪主）の氏名（逝去者との続柄）
- ・通夜の日時、場所
- ・告別式の日時、場所



「寄稿文 随時募集中」

寄稿内容は今回と同じです。なお、文字数はA4判1ページ1800字程度を目安にさせていただくと共に、原稿については、可能な限り電子媒体でお送り下さい。詳細は事務局にお尋ね下さい。

（財）東京農工大学後援会の名称変更

平成19年4月1日付けにて、文部科学省の認可を得て、（財）東京農工大学教育研究振興財団と名称を変更いたしました。東京農工大学に対する教育研究援助事業として年間1千万円以上の援助を行っておりますが、これを機に、更に拡充できるよう努力をして参ります。

「農工通信」への広告掲載のお願い

本会では、同窓会報「農工通信」を毎年8月下旬を目途に卒業生、現教職員、元教員等に対して、約40,000部を発行配布しております。

つきましては、御社の広告を是非ともご掲載いただきたく、下記の要項にてご案内申し上げます。

記

1. 広告ページの大きさはA4判で仕上がり寸法と掲載料金は次のとおりです。
 - ・ 1ページの場合：縦26cm×横18cm（掲載箇所を問わず 80,000円）
 - ・ 1/2 // : 縦13cm×横18cm（ // 40,000円）
 - ・ 1/4 // : 縦13cm×横9cm（ // 20,000円）
2. 印刷はオフセット印刷で版下は御社でご準備願います。なお、版下をお持ちでない場合は、実費で作成の斡旋をいたしますので下記にお申し込みください。
3. 掲載箇所については、本会において調整させていただきます。
4. お申込みは随時受け付けます。
5. 申込み先・問い合わせ先

〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1
東京農工大学同窓会事務局長 山田 昭一
TEL 042(364)3328 ; FAX 042(335)3500
E-mail info@tuat-dousoukai.jpn.org

[平成19年度部会・支部活動費の申請について]

平成18年度の第43回東京農工大学同窓会通常総会・理事会において、還元金制度を廃止し、「部会及び支部の運営に必要な経費補助として、部会・支部活動費を交付する」改正が承認されました。

本活動費は、部会・支部から交付申請を戴くことで支給することとしています。つきましては、部会・支部連絡員の方は、平成19年度活動費（予定のものでも可）の申請書に記入の上、事務局に提出してください。

〔注意〕 本活動費は、部会・支部総会開催補助金とは異なりますので、補助金は別途申請してください。

地元 小金井市の商社

有限会社 高岡機工

〒184-0001 東京都小金井市関野町1-4-6

TEL : 042-383-6100 FAX : 042-384-4993

E-Mail : takaoka@basil.ocn.ne.jp

☆お気軽にお問合せ下さい

- * 試験片・実験材料 販売及び製作
- * 研究装置・機器 製作、相談
- * 素材部品・加工 相談、受請 加工機械販売
- * 装置部材・機械部品 販売
- * 各種工具販売 作業台・実験台及びスチール製品販売
- * 各種部材(ネジ・材料・配管部材)
- * 修理、アフターフォロー、各メーカー情報のフィードバック

財団法人 日本食品分析センターは
分析試験を通じて社会の進歩、
発展に貢献します。

食料・飼料の栄養分析

環境の分析

家庭用品の分析

食料・飼料の衛生試験

医薬品・化粧品の分析

その他事業



財団法人

日本食品分析センター

ホームページ <http://www.jfirl.or.jp>

東京本部 〒151-0062 東京都渋谷区元代々木町52番1号
TEL 03-3469-7131(代) FAX 03-3469-7009

大阪支所 〒564-0051 大阪府吹田市豊津町3番1号
TEL 06-6386-1851(代) FAX 06-6380-2411

名古屋支所 〒460-0011 名古屋市中区大須4丁目5番13号
TEL 052-261-8651(代) FAX 052-261-8650

九州支所 〒812-0034 福岡市博多区下呉服町1番12号
TEL 092-291-1256(代) FAX 092-291-1135

多摩研究所 〒206-0025 東京都多摩市永山6丁目11番10号
TEL 042-372-6711(代) FAX 0423-72-6700

千歳研究所 〒066-0052 北海道千歳市文京2丁目3番
TEL 0123-28-5911(代) FAX 0123-28-5921

彩都研究所 〒567-0085 大阪府茨木市彩都あさぎ7丁目4番41号
TEL 072-641-8721(代) FAX 072-641-8700

仙台事務所 〒980-0011 仙台市青葉区上杉2丁目4番4号
TEL 022-221-9461 FAX 022-221-9460

平成18・19年度東京農工大学同窓会 農芸化学・応用生命化学部会長 久米賢次



牧場産直 価値ある本物

- * 新鮮！美味！安心！「ゴールデンポーク」「スーパーゴールデンポーク」
- * ドイツ DLG 国際食品品質競技会9年連続金メダル受賞！
「世界が認めたハム・ソーセージ、デリカ調理食品」
- * 本物の食と健康の理想郷！「ミートショップ・レストラン・地元農産物直売所・天然温泉まきばの湯・パークゴルフ場他」P1000 台完備

株式会社 **埼玉種畜牧場・サイボクム**
代表取締役会長 **笹崎龍雄**（昭和15年・獣医学科卒）

TEL. 042-989-2221（代） FAX. 042-989-7933

<http://www.saiboku.co.jp/> 〒350-1221 埼玉県日高市下大谷沢546

理化学機器

有限会社

新栄化学商事

営業品目

- ・各種ガラス・樹脂製品
- ・理化学用測定器類
- ・その他消耗器材
- ・精密機械加工
- ・板金加工

〒197-0003

東京都福生市熊川1325番地 1-21-201

Tel & Fax 042-551-3405

人と出会い、 自然と調和する。

73東陸自2貨2第293号
蓼科観光株式会社 松島運輸株式会社

取締役 松島勝之助
社長（昭和16年農）

相談役 野田大
（昭和26年農）

本社 東京都杉並区松ノ木1丁目12番4号

電話 03-3313-2291(代)

FAX 03-3313-2043

美濃戸管理事務所

長野県茅野市玉川字原山11400番

0266-74-2221(代)

丸山管理事務所

長野県諏訪郡原村字原山1217番24

電話 0266-74-2012(代)

本社 東京都杉並区大宮1丁目22番35号

電話 03-3316-3217

FAX 03-3317-3497

多摩営業所

東京都町田市小野路町1048番1号

電話 042-736-2471

東京都知事許可(特16)第122771号

松島興業株式会社

代表取締役 松島勝之助
会長（昭和16年12月農）

本社 東京都杉並区松ノ木2丁目1番12号 MKビル

電話 03-3313-2411(代) FAX 03-3317-3497

多摩営業所 東京都町田市小野路町1048番1号

電話 042-763-2471 FAX 042-736-2427

**MATSU
SIMA**

松島興業株式会社

忘年会・新年会・歓送迎会・クラス会・謝恩会
PTA会合・周年行事・結婚披露宴・御法事

CATERING Service

出張料理

1 year party・御宴会は
サンフリアで!!

お集まりにふさわしい雰囲気演出致します。
お客様のご予算に応じたお料理お飲物を調整致します。



グラス～テーブルクロス等
あらゆる備品を用意し、
セッティングからサーバー
後片付けまですべて
おまかせ下さい。

府中グリーンプラザ内
府中駅北口駅前

サンフリア

TEL&FAX (042) 368-6368

府中グリーンプラザ 会議室・和室等を御利用下さい。10名様～250名様
府中市府中町1-1-1グリーンプラザ3F

試薬 理化学機器

株式会社 三友商会

代表取締役 金森 信次

〒183-0041

東京都府中市北山町2-33-58

PHONE 042(502)1200

FAX 042(502)1300

E-MAIL sanyuu@jcom.home.ne.jp

カザミは、

お客様のニーズに合わせた

たれとソースを

作ります。

営業本部/工場 〒326-0044 栃木県足利市助戸1の26
TEL0284 (41) 2527 FAX0284 (44) 2618
本社 〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町2番4号柿沢ビル5階
TEL03 (5695) 1671

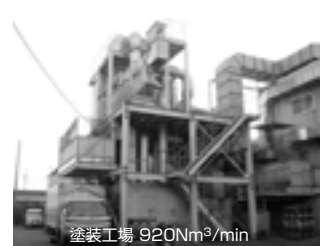
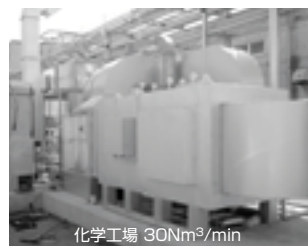
たれとソースの総合食品 株式会社 カザミ



新触媒技術「アルマイト触媒」による

VOC排ガス触媒燃焼処理装置

アルキャットでは優れた低温活性と熱応答性を併せ持つアルマイト触媒を採用することで、従来にはない特長を持つVOC触媒燃焼装置をご提供いたします。



コンパクトで低燃費。環境に優しい処理装置

- 低燃費
- コンパクト・省スペース
- 迅速な起動・停止
- 充実した安全装置・操作性

株式会社アルキャット

東京都小金井市中町2-24-16
TEL&FAX : 042-388-7761
E-mail : info@alcat.co.jp
http://www.alcat.co.jp

昭和22年獣医学科卒

府中動物病院

院長 獣医師 宮本 譲

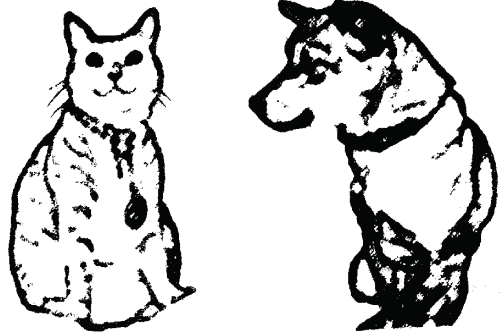
府中市宮西町4-16-5

TEL 042-361-4102

FAX 042-361-3093

家族で動物と暮らし、慈しむ事で豊かな心を育てたいと考えております。

金重動物病院



能見台本院 横浜市金沢区能見台通33-1
TEL 045-783-5658

戸塚分院 横浜市戸塚区汲沢町428-7
TEL 045-861-2812

千葉分院 千葉県長生郡長生村七井土1741-5
TEL 0475-32-6602

院長 金重 辰雄
金重 淳子

私たちは同窓会を応援します

ねえ、そろそろ同窓会しない?

同期会やクラス会をはじめ総会、支部会、各種OB会の案内発送、出欠管理など
同窓会活動の安全サポート!!

同窓会++ <http://www.dousou.info>

- 情報化支援
- デジタルコンテンツ
- 販促集客支援(DM発送代行)
- 編集・出版
- プリントオンデマンド
- 印刷物全般

小野高速印刷株式会社

TEL 097(558)3444(代) FAX 097(552)2301

〒870-0913 大分市松原町2丁目1-6
<http://www.ohp.co.jp> E-mail: oita@ohp.co.jp



Theme “まだ削りますか!?”

弊社は転造盤の国内トップメーカーとして、社会に貢献させて頂いております

転造とは…

簡単に表現すると、読んで字の如く
転がして造る加工方法です。



特徴

ネットシェイプ成形のため、環境に易しく、
又、切削と比較して効率の良い加工方法です。



経済産業省

“2007年版

元気なモノ作り中小企業300社”
に推薦頂き、受賞いたしました。

代表取締役社長
新 仏利 仲
(S46年 卒業生)

株式会社 ニッセー

山梨県大月市富浜町鳥沢2022

Tel : 0554-26-6012

Fax : 0554-26-6017

HP : <http://www.nisseiweb.co.jp>

後記 編集集

「農工通信78号」をお届けします。今号の表紙は小金井図書館の水彩画です（佐藤勝昭先生、有り難うございました）。内容構成は、77号に掲載させていただくことができなかった8名の方々を含む、31名の方々からご寄稿を頂きました。有り難うご

ございました。次号も、会員の方々の寄稿を中心に編集しますので、皆様の積極的なご寄稿をお願いする次第です。（題目欄を除く文字数は、0.5ページで850字、1ページで1800字）。新しい企画案などもお寄せください。今後ともご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

今年から同窓会創立50周年記念事業がスタートします（34頁参照）。会員の皆様方には、募金活動等について、物心両面でのご支援、ご協力をお願いします。

いま農工大キャンパスは深い緑に包まれています。ぜひ、この都会のオアシスにいらして下さい。きっと心身ともリフレッシュされることでしょう。
（桑原利彦、生産機械S57）

農工通信 第78号

発行日 平成19年（2007年）8月1日

発行所 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 東京農工大学同窓会事務局

TEL 042（364）3328 FAX 042（335）3500

e-mail info@tuat-dousoukai.jp <http://tuat-dousoukai.jp>

振替口座 00120-9-93147番（加入者負担）

加入者名 東京農工大学同窓会

印刷所 小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

農工大MOT 学生募集

もう一度母校で
学んで
みませんか

MOTって？

MOTは、技術を事業化するための知識とスキルを身につけるための大学院です。
農工大では、2005年4月に専門職大学院MOTを開設いたしました。
農工大MOTは技術リスクマネジメントに重点を置いています。



農工大MOTは、先端産業ビジネスを創出できる21世紀のスマート
マネジャーを徹底的に育成することをミッションにしています。
詳しくは、<http://www.tuat.ac.jp/%7Ermot/> をご参照ください。

農工大MOT入試説明会

- 日 時 10月20日(土) 及び 1月12日(土)
- 場 所 田町 キャンパスイノベーションセンター